

沖縄県八重山諸島・波照間島の現状と未来

—持続可能な観光マネジメントを考える—

The Present and Future of Hateruma-Island, Yaeyama-Archipelago, Okinawa:

A Sustainable Tourism Management

小林天心ゼミナール 3年：高山クミ（ゼミ長）、清水怜奈、加瀬安菜、中村綾華、
佐々木かな、神津和納、武田明莉、島田唯花

私のゼミでは3年次の毎年、全員参加のフィールドワーク（FW）を行う。ある特定の地域を取り上げ、その地域の将来や観光の可能性につき、ゼミとして何らかの提案を行うことが目標である。今までに取り上げた地域は、栃木県の湯西川温泉、小笠原諸島、九州五島列島北端の小値賀島^{おぢか}など。そして2014年度のゼミでは、沖縄の最南端、波照間島に取り組むことになった。学生全員が、「自分だったらここについて、このような研究をしたい」という計画を出し合う。どんな地域なのか、そこを研究したい理由は何か、日程や予算はどうか。さまざまな要素につき、あれこれ検討を重ねる。波照間島に決まったいちばんの理由は、何と言っても日本の最南端の島というロケーションにある。人口がわずか530人ほど、という点にも心を引かれた。そして何より南の島・沖縄という、観光地としてのブランド力も大きかったに違いない。

しかしながら、波照間や沖縄に関しての文献を調べ、それぞれで取り組み始めて学生たちにわかったことは、「たんなる観光地ではない」という重い事実である。文献ひとつとっても、気の遠くなるような膨大さ。なかんずく、太平洋戦争という、大変な歴史がある。そのあとに続く、米軍占領時代。さらに今日に至るまで沖縄が背負ってきている、日米関係。それだけにはとどまらない。一見明るい観光地としての沖縄には、明治に至る前までの本土とは全く異なる歴史があった。ひとくちに言うところの「沖縄」とは、また異なる相貌が現れてくる。

気軽に釣り糸を垂らしてみたのだが、たとえて言うなら「かかった魚はとてつもなく大きかった」。沖縄・波照間というのは、とても一筋縄ではいかない。年間の観光客数はざっと3万人である。もちろん波照間に限られたことではないものの、なかんずく太平洋戦争をはさんでの沖縄は、島のサイズなど無関係に大変な歴史を抱えている。基地問題などを含め、その実態や今に至るまでのプロセスは想像を超えていた。

FWの時期は6月末からと決めて準備を急いだが、この時期は波照間の気象条件が実は大変厳しい、ということさえアタマになかった。石垣からの高速船も、時に週の6割もがキャンセルになる。天候は

荒れ模様、気温はとても高い。いろいろな事情が絡んだあげく、結果的にFWに出られた学生は、女子のみ8名という事態になった。「こんなはずではなかった」というのが、参加できた学生たちの偽らざる本音であろう。

それはともかく、およそ1週間の波照間滞在の結果を、なんとかこのレポートにまとめることができた。全島民をはじめ関係者御一同に、感謝の言葉もない。本当にありがとうございました。至らぬことはいっぱいである。しかし、ゼミ生8人は波照間の暑さに往生しつつ、なんとか調査をやり終え、それらのデータを分析し、今後の方向性や波照間への提案を懸命に考えた。関係各方面からの、忌憚のないご意見をいただきたいと思う。

(小林天心)

もくじ

はじめに

| | | | |
|-----------------------------------|-----|--------------------------|-----|
| 1. 沖縄および波照間の概略…………… | 181 | 3) 環境客とゴミの問題 | |
| 1) 地理 | | 4) 島民の観光に対する意識の差 | |
| 2) 人口 | | 5) 少子化と高齢化 | |
| 3) 観光 | | 6) 有効利用されていないハコモノ | |
| 4) 自然 | | 7) 竹富町・波照間島の滞在泊数 | |
| 2. 波照間の歴史をたどる…………… | 186 | 8) 宿泊施設の質的不十分さ | |
| 1) 奴隷制より過酷だった「人頭税」 | | 9) 飾らない波照間 | |
| 2) 波照間における戦争とマラリア | | 10) 世界に発信すべき波照間 | |
| 3) 波照間の歴史年表 | | 7. 私たちからの提案…………… | 219 |
| 3. 波照間での生活…………… | 195 | 1) レンタサイクルの整備 | |
| 1) 主な産業 | | 2) はてるマップ | |
| 2) 教育 | | 3) 民泊制度の実施 | |
| 3) 売店やレストランなど | | 4) 宿泊施設の基準設定 | |
| 4) 郵便・宅配・通信など | | 5) 修学旅行生の誘致 | |
| 5) 上水道の整備 | | 6) 農村集落センターの活用 | |
| 6) 交通 | | 7) 星空観測ツアー制度の改善 | |
| 4. アンケート調査結果…………… | 189 | 8) フィルムコミッション | |
| 1) アンケートの概要 | | 9) マイボトル持参制度の導入 | |
| 2) 観光客からみた波照間 | | 10) 「SLOW」な旅行の提案 | |
| 3) 島民からみた波照間 | | 11) 目的特化型の個人向け旅行企画 (SIT) | |
| 4) 小中学生からみた波照間 | | 12) インバウンド市場 | |
| 5. インタビューからみる波照間…………… | 213 | 13) 市場開拓 | |
| 6. アンケートおよびフィールドワークから見えてきたもの…………… | 215 | 14) パンフレット情報の出し方 | |
| 1) 島間交通機関の現状 | | 15) 起業支援制度 | |
| 2) 島内での交通機関 | | 8. フィールドワーク体験記…………… | 230 |
| | | おわりに…………… | 236 |
| | | 参考文献…………… | 237 |

はじめに

はてるまじま
波照間島は、沖縄の八重山諸島にある日本最南端の有人島。波照間という表記は当て字であり、「果てのうるま」に由来するという説が一般的である。うるまとは琉球、またはサンゴ礁の意味だ。人口536人、面積はおよそ13km²。行政区は竹富町。7つの有人島からなる竹富町は、総人口およそ4000人だ。石垣島から定期便で1時間ほどの場所にあるこの島にあるのは、灼熱の太陽のもとキラキラ輝く真っ青な海と風に揺れる一面のサトウキビ畑、そして静かだが温かい島民だけだ。都会にあるものは、波照間にはほとんどないと言ってい

だらう。その風景に惹かれ、波照間島を調査対象として選ばせていただいた。波照間観光の現状を把握し、今後の見通しをたて、学生の視点による提案を行う。観光学を学ぶ学生の立場から、何かお手伝いのできるのではないか。この背景には、日本全体の少子化、高齢化、さらには多くの地方、なかんずく離島における激しい過疎化傾向がある。それぞれの地域において、本当の問題とは何か。地域の人々の考えはどうか。解決策があるとすればどうするのがいいのだろう。

亜細亜大学経営学部のホスピタリティ・マネジメント学科、小林ゼミナール3年8名による、『波照間島魅力発掘プロジェクト』はこのような観点からスタートした。ゼミ調査活動は、2014年6月23日～7月1日まで、手分けをして全島の家庭を訪問し、島民の方々全員を対象とするアンケートを配布。また、波照間島の小中学生へのアンケート、波照間島を訪れる観光客を対象としたアンケートを実施した。波照間島でのフィールドワークは私たちの想像をはるかに超えるトラブル続きであった。結果への期待という点では、いつも

ながら不安が付きまとう。とはいうものの、そこで止まるわけにはいかない。それをデータとしてまとめると同時に、いろいろなご意見も集約してみる。それから明らかになる実情、われわれの直接的知見。地域を自分たちの身体で感じてみる。こうした直接体験を通して、波照間島の現状を把握し、波照間島の未来を私たちなりに考え、具体的な提案を行いたい。

1. 沖縄および波照間の概略

沖縄県は沖縄本島から最西端の与那国までを含む、大小363の島からなっている。このうち有人島は46島。島々の面積こそ、全部足しても2277km²だから、日本全体の0.6%にすぎない。しかし海域では東西900km、南北400kmという、日本最大の面積をもっている。人口およそ142万人。

地理的には、沖縄は2つに分かれる。A地域（沖縄本島および周辺・奄美）と、B地域（南西に位置する宮古から与那国までの先島諸島）という地域。AとB両地域の間は250kmも離れていて、この間には島が存在しない。B地域の西端・与那国は台湾の東、わずか100kmのところ

に位置している。もちろん台湾と与那国は目視可能。それゆえ、数千年前から、東南アジア方面とB地域のあたりは人の往来があったものとみられている。

沖縄圏の行政区として竹富町の2013年現在、全人口4061人。有人島別にみる住民の数を並べると、
いりおもてじま西表島2280人、こはまじま小浜島612人、波照間島536人、
たけとみじま竹富島351人、くろしま黒島209人、はとまじま鳩間島61人、あらぐすくじま新城島14人、といった順になっている。

150万年前ぐらいには、B地域は中国大陆や台湾との陸続きになっていた。もちろんその頃の沖縄本島は、九州と陸続きだった。オーストラリアからインドネシア、フィリピン、台湾という島伝いのルートをたどってみると、AとB両地域の間

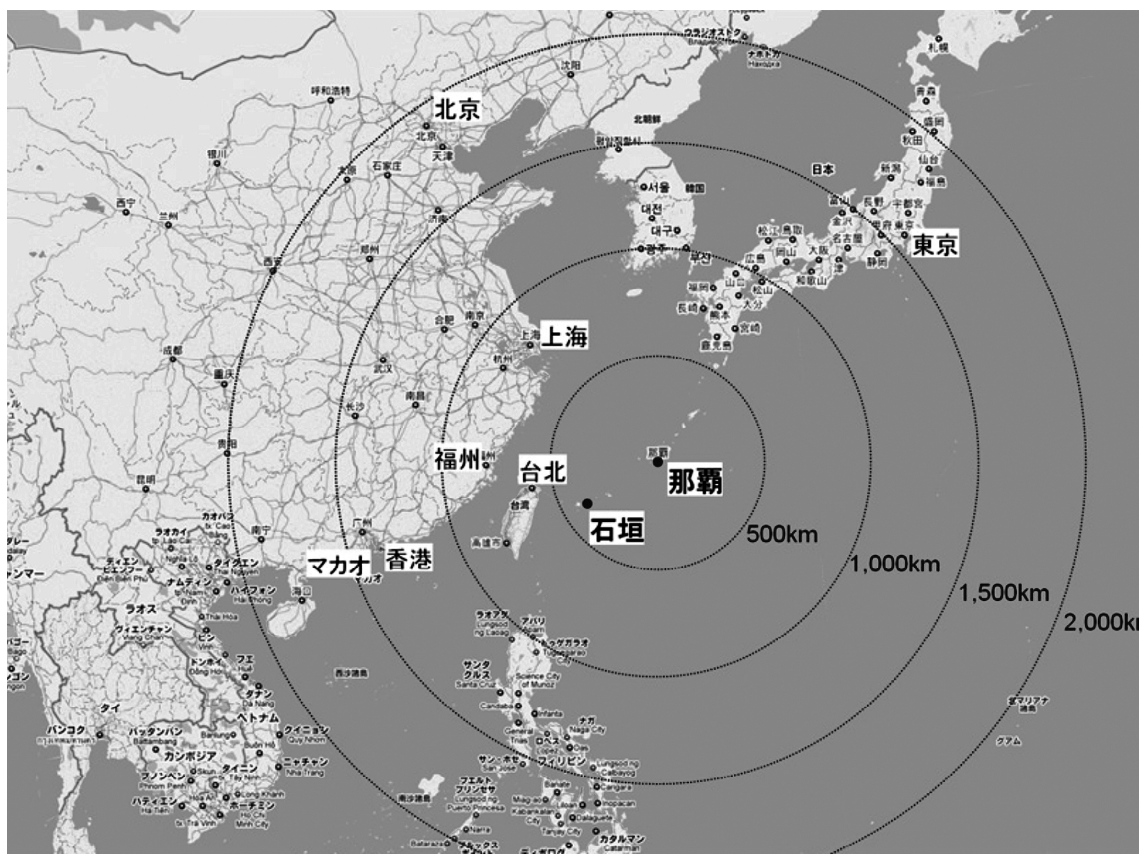


図1 アジアの中に占める沖縄あるいは八重山の位置
出所：竹富町観光協会・じゃらん（2014）

が250kmと、島々の間では最も離れている。有視界航海が不可能なこれだけの距離になると、この間の往来は簡単ではない。つまりAとBという2つの地域は、それぞれ別の自然条件によっており、その文化的背景においても、とくに10世紀以前からははっきりした違いがあった。

波照間はB地域の南端にあり、もちろん日本最南端に位置する、周囲15km、13kmほどの小島である。東西に長く、小判あるいはハンバーグのような楕円形をしている。沖縄の島々は、サンゴ礁が隆起したフラットなもの（低島）と、地殻変動や火山活動による隆起の高い山をもつもの（高島）との2種類に分けられる。沖縄で最も高い山は石垣島の於茂登岳（562m）。波照間は前者の典型で、島の最高地点の標高でも45mほどにしかならない。

現在はサトウキビ畑と多少の牧畜がみられる静かな島である。行政区域としては竹富町に属している。なお竹富町の役場は、これらの島々へのアクセス上もっとも都合のいい、竹富島から船で10分の、石垣市に置かれている。

B地域には、Aに見られるような縄文や弥生の出土品がない。沖縄本島までは明治以降の考古学的調査も比較的進んでいるが、B地域に関してはまだまだ行き届いた調査が及んでいるとはいえない。したがってB地域の12世紀以前に関しては、神話あるいは伝説などからおおよその推測をおこなうか、中国朝鮮などの文献に頼るのみとなっている。しかしながら、B地域に住む人びとの起源をたどるなら、先にも述べたとおり東南アジア、台湾方面からも島伝いに渡ってきた人々が今から数

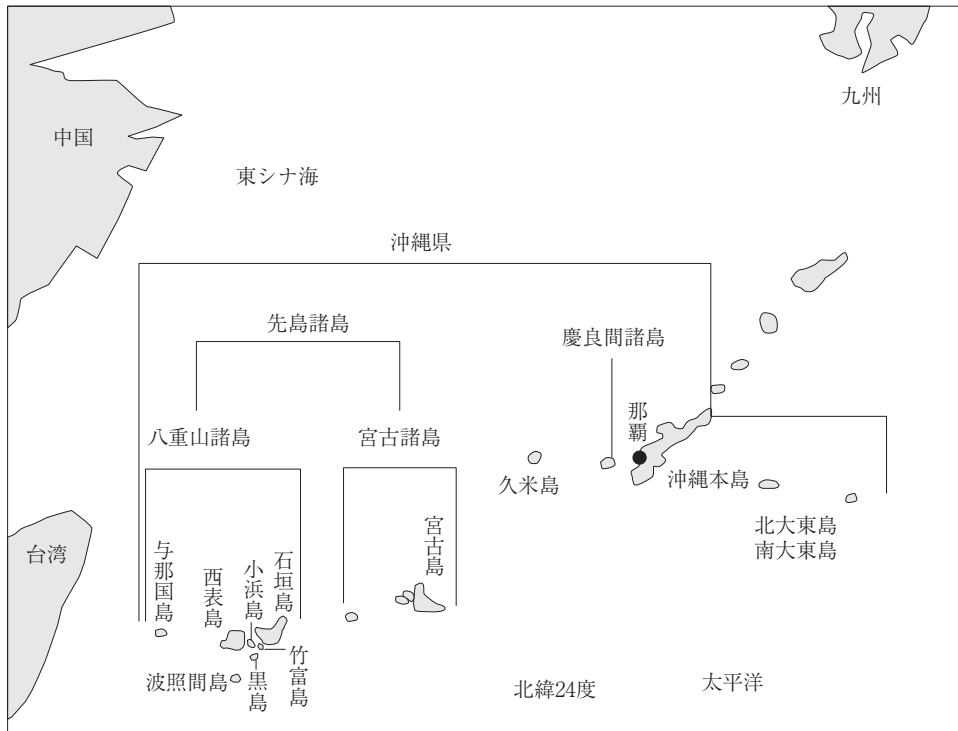


図2 沖縄県概略図

出所：波照間島総合観光情報ポータルサイト



写真1 ニシ浜から見る、サンゴの海

千年前に定住したとみられ、言葉や音楽など文化的背景も、A地域とは分けて考えるべきと判断されている（外間，2013；安里・土肥，2013；竹中，1975；奥野，2007）。

1) 地理

波照間島は、沖縄県の八重山諸島にある日本最



写真2 中心地へと続く砂浜の道とハイビスカス

南端の有人島である。

波照間島を含む、西表島、竹富島、小浜島、黒島、鳩間島、新城島、由布島、嘉弥真島といった9つの有人島と、その周囲にある仲御神島などの7つの無人島が竹富町に属している。竹富町は、東西約42km、南北40kmほどの広範囲に及び、町役場本庁舎を八重山経済の中心地である石垣市に置

く、特異な行政形態となっている。なかでも波照間島は、面積12.77km²、周囲14.8km、標高60mということで、徒歩でも島内を一周できるほどの小さな島である。

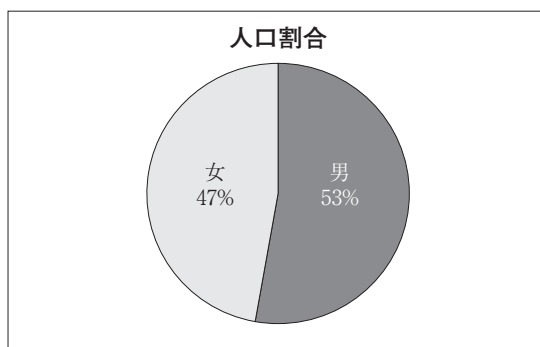
石垣港離島ターミナルから波照間島までは高速船で1時間、または大型フェリーで2時間ほどの距離にある。不定期航路の場合、途中の西表島大原港への経由便となる。高速船は日に5便、大型フェリーは週に5便が出ている。しかし、高速船は速く便数は多いが、波の影響を受けやすく欠航することもある。一方、大型フェリーの便数は少なく時間がかかるものの、波の影響をあまり受けないため、欠航は少ない。ほかに以前まで波照間空港からローカル線として小型飛行機（9人乗り）が就航していたが、現在は運休中。人々が日常的に訪問できる日本最南端の地ということで、島内にある「日本最南端の碑」や「日本最南端平和の碑」「日本最南端の郵局」である波照間郵便局が人気高く、多くの観光客が訪れている。

2) 人口

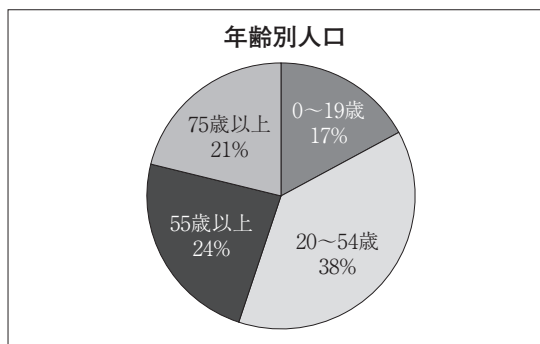
竹富町のホームページから得られる、2014年8月末現在の人口の情報を見える。まず、竹富町全体の世帯数は2315世帯、男性2169人、女性2044人、合計4213である。そのうち、波照間島は世帯数277世帯、男性283人、女性253人、合計536人である。

上記のグラフを見ると、55歳以上と75歳以上である老年人口の割合が総人口のほぼ半分を占めていることが分かる。一方子供は小中学生が45名と50人足らずであり、割合としてはとても少ない。

上記のグラフから見て取れるように、世帯数にはほとんど変化が見られない。一方、人口は大きく減少しているのが分かる。大家族の若年層が徐々に島を離れ、高齢者が島に残されたという状況が推測される。



(2014年8月末現在)



(2014年3月末現在)

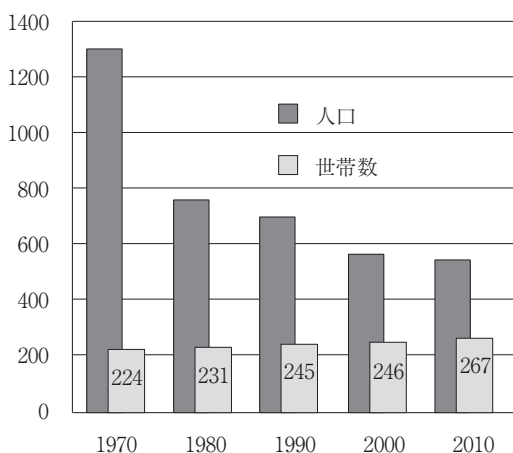


図3 波照間島の人口と世帯数の推移

出所：竹富町役場 (<http://www.town.taketomi.lg.jp>),
波照間島総合観光情報ポータルサイト (<http://www.haterumajima.net/>)



写真3 波照間港から見える、歓迎のあいさつ

3) 観光

竹富町の観光客数は、右肩上がりです。増加理由は、“ちゅらさん”ブームや新空港開設、日本国内でのLCCの就航などがあげられる。そのなかで波照間島は、2008年に初めて3万人を突破し、その後も大きな変化はない。しかし、このうちのほとんどが日帰り観光客であるといわれている。現在、波照間島への交通手段は石垣島から、1日に5便の高速船が全便運航となれば、朝に石垣を出て、波照間からの最終便で石垣に戻ってくることも可能である。そのため、宿泊することなく半日のみの観光客が増えているのが現状だ。

波照間に大規模なホテルや旅館はなく、住民らが運営する民宿が主な宿泊施設となっている。現在は、民宿施設・ゲストハウス含め21施設。民宿は1泊2食付で平均5000円から6000円、素泊まりだと2000円で宿泊できるところが多い。このような結果から、たとえ宿泊しても素泊まりで滞在費を安く抑え、海でシュノーケリングやダイビングを楽しみ、翌日には島を出るという観光客が少なくない。今後は、波照間での観光客の滞在日数を増やす取り組みを行うのが、経済効果につながるものと思われる。

海、星空、自然とたくさんの魅力をもつ波照間島に「観光産業」という概念はまだ定着していないと感じる。島民の人々が今よりもっと観光に

私たち日本最南端に住む竹富町民は、
私たちのかけがえのない島の宝を守り育て、
島人と旅人とともに幸せになれる
まちづくりを通して、
豊かで誇りある生活を、
子孫の代まで受け継ぐことを決意し、
ここに「竹富町観光立町」を宣言します。

1. 私たちは、豊かな自然の恵みと、
先人達が育ててきた文化を、
感謝の気持ちと共に大切にします。

1. 私たちは、島々の多彩な個性を活かし、
国内外から訪れるお客様を、
島人の誇りと笑顔と真心で
お迎えします。

1. 私たちは、1人1人が主役となって、
幾度も訪れていただける
“南の島”竹富町を、
ともにつくりあげることを誓います。

表1 竹富町・観光立町宣言(2010)

目を向けることで、観光客の滞在満足度、消費金額、リピーターの増加につながるはずである。

4) 自然

日本で最南端の有人島である波照間は、熱帯雨林気候に属しており、一年中穏やかな気候である。年間平均気温は東京よりも約7℃も高く、那覇よりも0.7℃ほど高くなっている。

気温は8月が最も高く、最高で32.5℃を観測した。最低気温は1月が最も低いが、16℃ほどであり、年間を通して温暖である。

亜熱帯特有で、波照間島を含め沖縄の島々ではスコールもあり、降水量は多め。梅雨期間は5月



写真4 優しいヤギたちが迎えてくれる



写真5 島から見えるサトウキビ畑と空のキレイさ

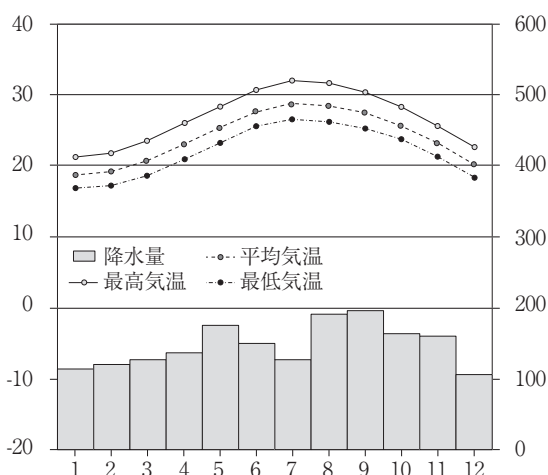


図4 年間気温・降水量一覧

出所：島の散歩 (<http://shimanosanpo.com/churajima01/hateruma00/kikou.htm>), 波照間島のすがた (<http://www.kt.rim.or.jp/~yami/hateruma/info.html>), 安栄観光 (http://www.aneikankou.co.jp/tour/haterumajima_c.html), 離島ドットコム (<http://www.ritou.com/yaeyama/hateruma.shtml>)

から6月。梅雨期間以外では、季節の変わり目である10月にも雨が多くなる。

沖縄のなかでも宮古島・八重山諸島は台風銀座とよばれており台風によって多大な影響を受ける。

波照間島の魅力はハテルマブルーと呼ばれる美しい海、サンゴや熱帯魚をみることができる。ほとんどの観光客の目的は、海や星の観測といった波照間の「自然」をみに来ることだ。



写真6 終わりが見えないほどのまっすぐな道

2. 波照間の歴史をたどる

15・16世紀になってようやく、アフリカやアジア、新大陸方面へと西欧の膨張が始まった。西洋の歴史はそれを、世界史上の大航海時代と名付けている。ガマ、コロンブス、マゼランなど名前を知らないものはない。しかし、ポルトガルやスペインが世界に乗り出すはるか前の7・8世紀、すでにアラブ・ペルシャ、インド、中国間においては活発な海上の道の交易がおこなわれていたし、10世紀以降その道はさらに東へ、琉球、日本までそれは続いていたのである。12・13世紀にはすで

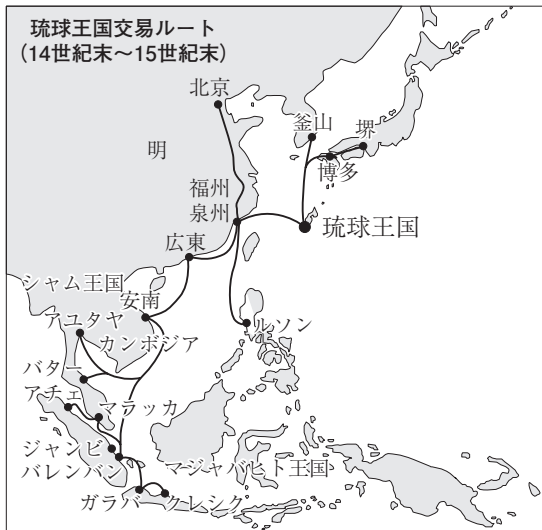


図5 琉球王国貿易ルート図
出所：那覇国際コンテナターミナル株式会社

に日本からも、倭寇と呼ばれた海賊・商人たちが、朝鮮・中国・東南アジア方面まで、精力的な活動を展開していた。15世紀初頭、アフリカまで遠征した中国の鄭和の大艦隊を見ると、「大航海時代」などまるで見戯に等しい。鄭和の艦隊は60隻、クルーと兵士3万人、旗艦は3000tという途方もないスケールだった。コロンブスのそれは3隻、旗艦のサイズはたったの80tである。

さて、250kmという海による隔たりを超えて、琉球本島と先島諸島の交流が記録されているのは、14世紀以降である。1390年、琉球本島の中山王に対して先島諸島は朝貢を行い始めた。この頃になると琉球と中国（明）との交流は頻度を高め、貿易のみならず留学生を送り、あるいは明からの知識人や技術者を多く受け入れた。彼らの多くが那覇に定住する。また西のマラッカ、中国福建省の泉州、東の琉球という、アジアにおける海上交易の拠点としても、琉球は重要な位置を占めるようになった。

1477年には尚真王が、奄美から先島諸島までを版図とする王国の絶頂期を作り上げ、16世紀中旬ポルトガルの本格的なアジア進出まで、琉球王朝

は東南アジアとの交易にも積極的だった。

〈薩摩の侵攻〉

しかし1609年、琉球王朝は薩摩藩の侵攻を許し、実質的には薩摩藩の属国、あるいは植民地化を余儀なくされることになる。薩摩は琉球を藩の一部として組み込むより、対外的（対中国、対幕府や他藩）には琉球国王を薩摩藩主の臣下とし、独立した国として扱う方が、はるかにメリットが大きい。中国貿易も、琉球を中継ぎとすることによって江戸幕府の了解を得、莫大な利益を得ることができた。琉球王朝は体面上独立国として、中国への朝貢を保ちつつ、薩摩藩へも貢納しなければならない。いわば「両属」の体制。それゆえ琉球王朝としては財源に関し、一層の厳しい徴税に頼らざるを得ない。民にとってまことに過酷な時代が生まれた。これがとりわけ悪名高い、八重山に対する「人頭税（後述）」である。しかし18世紀から19世紀にかけての王朝はその文化と体制を確立、以後明治維新にいたるまで、それなりに安定した国家として存続した。

19世紀になると、イギリス船やフランス船に続き、米国のペリーも琉球へやってきた。江戸に赴く前に、ペリーは琉球や小笠原に投錨、それぞれに対する通商関係を要求する。那覇においては薩摩の役人も、琉球人のように振る舞いつつ同席したとされる。明治を迎えて日本政府は版籍奉還を行い、廃藩置県による新しい国の確立を図る。そして名目上は独立国（清への朝貢国）ながら、実質は薩摩の属国扱いだった琉球をいったんは琉球藩としたが、1879年には一県として日本の版図に組み入れる決定を行う。これが「琉球処分」である。嫌がる（何としてでも清の朝貢国としての地位を保ちたかった）琉球王朝を、終焉に導いた明治政府の決断だった。

しかし明治政府はその王朝と旧支配層に対する配慮から、「人頭税」という徴税の仕組みは残し

たまま、20世紀初頭まで先島諸島民衆の苦しみに手を差し伸べなかった。ようやく人頭税が他県並みの租税に切り替えられたのは1903年である。つまり、先島諸島への圧政は薩摩と沖縄という2つの上層部分を変えつつ、実質的には太平洋戦争まで、およそ600年もの長い間続けられたのである。

沖縄からのハワイを始めとする多くの移住者というのも、その実態は貧しさに耐えられないからという、故郷をあえて捨てざるを得なかった人々の、決断であった。現時点では、沖縄出身の諸外国在住者は40万人に達している。現沖縄人口の28%にも相当する数字である。この比率を日本国に置き換えると3500万人。もし日本全体が沖縄と同じほどの在外滞在者をもつことになっていたとするなら、日本は大変な国際国家となっている。しかし、日本の現状は何かと内向き、東アジアの中でさえ孤立化の傾向にあり、とても国際化どころではない（鎌田、2010）。



写真7 放心状態で傷の手当を待つ少女
(沖縄平和祈念資料館提供)

〈太平洋戦争以後〉

太平洋戦争が終了、日本敗戦後の日本は米軍の占領下におかれ、1951年のサンフランシスコ条約によって、日本は名目上の独立を認められたが、沖縄は本土と切り離され、アメリカの軍政下に留め置かれた。日本の独立と引き換えに、日本政府は沖縄をアメリカに割譲せざるを得なかったのである。日本本土から沖縄への渡航にも旅券（身分証明書）が必要になる。通貨は米ドル。交通法規もアメリカ並み、車は右側通行である。72年の「日本復帰」まで、すべてアメリカ軍政下におかれて、アメリカ軍司令官がOKを出さない限り、何も事が進まなかった。アメリカ軍用地のために強制接収され「銃剣とブルドーザー」という言葉は、沖縄の民衆は全く動きを封じられたアメリカ軍の強権時代を表すものとなった。この基本構造をつくったのは「日米地位協定」だが、この協定は沖縄の日本復帰以後も、今日までそのまま温存されている。米軍はいまだに沖縄の土地の1割にも達する範囲を基地として使用し、在日米軍の75%もの基地負担を、沖縄は一県で耐えている。

こういった歴史的背景から沖縄の中には、明治の新体制の時も、アメリカによる統治の時も、琉球王朝体制からの、あるいは日本の支配からの、「政治的開放」として期待する向きがなくてはなかった。しかしながら、とくに先島諸島方面からこうした歴史を眺めれば、三重支配構造はまったく変化がない。「日本復帰」とされた1972年以降も、沖縄の米軍基地は治外法権下に置かれたままである。米軍が犯すいかなる犯罪も、いかなる事故も、日本政府の手の出しようがない。したがって日本がこのまま沖縄の在日アメリカ軍による植民地的負担を軽減できないようなら、もはや沖縄は独立した方がいい、という判断さえ成り立つことも不思議ではない。松島泰勝は『琉球独立論』の中で再三述べている、沖縄は「自らの政治的決定権」をもったことがない、というのはこういう歴史的

事情によっている（外間，2013；高良，2012；安里・土肥，2013；上里，2012；松島，2014）。

〈沖縄に国連本部を〉

都留重人は『日米安保解消への道』のなかで、1996年に沖縄県が発表した、2015年までに米軍基地が全面撤去されることを前提としたアクションプログラムと、以下の6月23日沖縄「慰霊の日」平和宣言を紹介している。

「私たちは、基地を平和と人間の幸せに結びつく生産の場に変え、来るべき二十一世紀に向け、若者が夢と希望を持てる“基地のない平和な沖縄”をつくることを決意します。そして、アジア太平洋諸国との長く友好的な交流の歴史と地理的特性を生かし、日本とアジア、そして世界を結ぶ平和の交流拠点となる国際都市の形成に、沖縄の未来を託したいと思います」

そして都留はそのための最適の具体的措置として、「国連本部を沖縄に誘致することではないかと思いついた」と書く。そして、インドのアスウィニ・レイ教授（ジャワハラル・ネルー大学）の次のような発言をも紹介している。

「国連本部を日本に置くことは、日本の安全に対するどのような外からの脅威にたいしても最も効果的な抑止措置となり得る。グローバルな集団的安全保障を促進する一方で自国の安全保障上のジレンマを解決できるというのは、あまり多くの国が享受できる選択肢ではない」（都留，1997；前泊，2011）。

1) 奴隷制より過酷だった「人頭税」

八重山における歴史を見る場合、他に見られない特徴を1つあげるとすれば「人頭税」であろうか。これは琉球王府が1609年に薩摩の実質的支配下になって以降、宮古・八重山地方のみに対して実施された、しかもそれが明治後期に至るまでほぼ300年間も続けられたという、すさまじいまで

に過酷な税制のことをいう。

人頭税は、まず八重山各地の村における耕作面積や生産力につき、^{むらくらい}村位を上・中・下の3段階に分けた。比率で言うと（上：中：下＝7：6：5）である。それに加え、^{ひとくらしい}人位という年齢別のクラス分けを、こちらは4段階に設定した。上が21～40歳、中が41～45歳、下が46～50歳、下下15～20歳（上：中：下：下下＝7：6：5：2）という割合。当時の平均年齢はせいぜい50歳だから、成年男女区別なく、ほぼめいばいの人数に、税の網をかけている。

この人と村の位を組み合わせて決められた課税からは、何人いえども、病人であろうが妊婦であろうが、逃れることができない。例えば上の村の15才の少年なら $7 \times 2 = 14$ 、中の村の43才なら $6 \times 6 = 36$ 、下の村の50才であれば $5 \times 5 = 25$ といった案配で、男女の区別はない。波照間においての課税は、粟の出来高に換算して行われた。さらにこれに加え、上と下の2段階による布の貢納もあり、むしろ機を織る女性の労働の方がより過酷だった。ひとくちに「公8民2」という生産の8割もが、税として徴収された。実質的には「生きるに精一杯」、あるいは「かつかつ死なない程度」といった、啞然とするほどの重い課税である。これに加え、毎月数日の労働使役があった。

琉球地方は台風、潮害、地震などの天災も、はっきりなしである。1771年の大地震の際には大半の村々が押し流され、住民の半数が亡くなった。1852年の台風では宮古の500戸が倒壊、引き続き旱ばつ・不作によって3000人が飢え死んだとされる。逃散、暴動も数多く起こっている。にもかかわらず、人頭税はおおよそ300年にわたって続けられた。

災害などで村がなくなる、あるいは人口減などで人口分布が偏った場合は、委細かまわず村の分割、移転、組み替えなどが行われたから、家族や親子、あるいは男女の離散なども離島間などで頻

繁に引き起こされた。村の大きな単位（郡に相当）を間切^{まぎり}といったが、間切の線引きさえ、役人たちが必要に応じて勝手に変えた。もちろん、琉球王朝への直訴も行われているが、基本的な変化はなかった。

〈人頭税の実態〉

明治になって宮古地方から農民代表が東京まで直訴に及んだ。その訴状からかれらの窮状を紹介する。

「農民の常食はさつま芋です。豊かな家でもお祭りなど特別な時以外、粟を食べる事はなく、大半の農民は粟の味さえ知りません。味噌を使えるものは島民の4分の1程度。ふつうには海水に水を混ぜて、芋の葉や蔓、海藻などを煮て食べます。海岸から離れている住民にとっては、塩が味噌の代わりです。醤油などはまずもって口にすることができません。内地のような漬物などは全くなく、豚に食べさせるために買った焼酎の粕を、さつま芋に付けて食べるくらいが精一杯です」。

「着る服にしても、実に粗悪で夏は芭蕉布1枚、冬は破れた木綿^{あわせ}の袷1枚が普通です。といっても、これでさえ島民の半分、残りの者たちは年中夏衣の1枚、貧しい家では家族中で芭蕉布1～2枚を着回すのがやっとといった有様です」。

「家は丸木を立て、草で屋根を葺き、萱を編んで四方を囲います。床と言っても大半は土間、やや上等になると丸太を二つに割り、地面に並べて床にします。蓆を敷ける者などおりません。小屋の広さは3間（1間は1.8m）×3間半1割、2間×2間半が6割、残りは9尺×9尺（1.5m²）2部屋が、せいぜいといったところですよ」。

（『琉球弧の世界』より、現代語訳に訳して引用）

あらためて言うが、これが「1894年の直訴状」に書かれている実情である。これはまるで奴隷制か、あるいはそれ以上の過酷さである。つまり琉球王朝が八重山までその支配範囲を広げはしたものの、王朝が位置した沖縄島からすると、八重山は完全にその植民地扱いだった。その実態が20世紀初頭まで続けられていたという事実を、現在では日本人のほとんど、あるいは沖縄人の相当部分までが知らない。

〈「楽園」への逃散〉

この過酷な人頭税が多くの悲劇を生んだ。島の人々は税の負担を軽くするため、墮胎、間引き、子殺し、逃散、盗賊化、島抜け、さらには海の彼方にあるとされた楽園「ニライカナイ」あるいは「パイパティローマ」（伝説上の夢の国南波照間）を目指しての船出などが、ひっきりなしに行われたという。妊婦に3m以上もある岩の割れ目を跳ばせ、人減らしを図ったとされる断崖が今も与那国にある。あるいは、いきなり「日の出までにどこそこに集まれ」という御触れが出され、それに間に合わなかった老人や病人などが殺された。つまり琉球王朝からの地域にかけられた重荷を、地域自身で少しでも軽減しようという、ローカル・コミュニティ自身の耐えがたい悲劇がここにある。

役人の任期は原則2年、単身赴任が普通だった。やりたい放題の彼らは、身の回りの世話から現地妻、気ままなお伽まで、独身・既婚を問わず、もちろん対価など払うことなく、という乱暴狼籍ぶりが伝えられている。一方では、役人の「お手付き」になれば士族の身分になれる、といった島民側の期待もなかった（柳田国男『海南小記』）。琉球王朝の八重山奴隷、あるいはそれ以下といわれるのは、こうした徹底的な収奪構造にあった。アメリカの奴隷制でさえ、表向きは、たかだか200年にすぎない。

人頭税は、琉球王府から任命され赴任してくる

役人（在番）が取り仕切った。八重山における人头税は明治になり王府が県に代わって以降も続けられ、ようやく他と同じ税制に切り替えられたのは1903（明治35）年のことである。こんなことが続けられていたのは、明治政府が沖縄を統治するに際し、琉球王朝という旧支配体制を、都合よく維新以降も実質的なだめ、温存する必要があったためとされている。つまり薩摩の支配を引き継いだ日本政府、琉球王朝勢力、八重山地方、という二重三重の搾取あるいは支配構造が、明治維新以降においてさえ40年近くも、あえてそのまま続けられたのである（網野ほか、1992、1993）。

2）波照間における戦争とマラリア

太平洋戦争末期。米軍による日本領土への上陸戦は、1945年2月硫黄島（小笠原の南方250km）で始まり、およそ1カ月半で日本軍2万人が全滅した。米軍が硫黄島を確保したことによって、日本全土が米軍の空爆可能圏内に入り、3月以降、硫黄島から飛び立つB29の猛爆に、北海道から九州までが晒されることになった。3月10日の東京空襲では、たった一晩で10万人が殺されている。

次に米軍が目指したのが沖縄である。3月26日から小手調べ的に慶良間諸島を攻めた米軍は、4月1日以降沖縄本島に、40万人の大軍をもって上陸作戦を敢行した。以後、3カ月間、地獄の沖縄戦が続けられ、およそ沖縄の住民15万人と、日本軍10万人、アメリカ軍1万2000人が死んだ。これは沖縄守備の日本軍が、この後に起こるであろう、米軍による本土上陸戦を一刻でも遅らせるため、沖縄での抵抗をなるべく長引かせるという、引きこもり戦術をとったためである。一般島民でさえ投降は禁じられたし、捕虜になるくらいなら死ねと、軍は人々に「集団自殺」まで強要した。（『鉄の暴風』ほか）。

沖縄海域の離島にも、4万人以上の日本軍守備隊が配置されていたから、米軍上陸作戦以前から、

各島々は相当な米軍の空爆を受けた。

〈西表島への強制移住〉

沖縄最南端の小さな波照間にも戦争は及ぶ。終戦の年の1月、山下という大柄な男が青年学校の指導員として波照間に現れる。波照間も数回米軍の空襲を受けた。3月、石垣の守備隊旅団長から全島民1275名に対して、西表への疎開移住命令が下された。

その頃には山下は「護郷隊」の中尉と名乗った、という証言がある。波照間には軍が配置されていなかったから、事実上山下が石垣からの命令を伝達する形となり、全島民を指揮した。児童250人ももちろん一緒である。島民はそれぞれ数十名の組に分けられ、4月上旬から順次、カツオ船などに分乗して疎開を始めた。身の回り品とできる限りの食糧などを携え、西表南部海岸地域から、東部の古見部落方面へ。急ごしらえの掘った小屋をつくり、かつかつの生活をするようになったのである。鹿川湾南風見田海岸近辺におけるわずかな慰めは、海の方こうに波照間が見えることだった。

沖縄全域はサンゴ礁の隆起により形成された水のない低い島々と、火山の隆起による山々をもち、水もある高い島々に大別される。前者の代表が宮古島や波照間島、後者の代表が石垣島や西表島である。前者では常に飲み水や生活水に苦労が絶えない。後者は豊かな水に恵まれているものの、当時はまだマラリアという、ハマダラ蚊によってもたらされる恐ろしい熱病が残っていた。とくに人口数百人の、開拓がほとんど進んでいなかった西表島は、マラリアの代表的な地域だった。

戦時下の波照間は、パイナップルやサトウキビ畑、そして牛700頭、豚400頭、馬150頭、ヤギ1500頭などといった農業と、カツオ漁による半農半漁の生計をたてていた。しかし、急な疎開命令によってこれらの家畜はすべて屠殺したあげく、

軍の食糧に供出，という辛い事態にも全島民が耐えなければならなかった（『もうひとつの沖縄戦』から，当時の194戸調査，75頁）。

〈おそろしいマラリア禍〉

波照間から移住した人たちは，ロクな食料もない貧しい暮らしを始めたが，あっという間にほぼ全員がマラリア蚊の猛攻に直面する。もちろん波照間の人たちはマラリアを知らないし，それへの抵抗力もない。5月から7月というわずか3カ月の間に大半の人々がマラリアに罹ってしまった。それでも住民たちは必死の思いで，数人ずつが小舟をあやつり，波照間まで食糧探しに出かけたりもしなければならなかった。子どもたちはジャングルの木の下や，河原の狭い平地で勉強した。多くの島民は，波照間に帰りたがった。しかし山下は頑として帰島を許さない。軍刀を振り回し，「波照間に帰ろう」という大人や子どもを脅しあげた。ハエが多いからと子どもたちに「1日ひとり何匹ずつ，ハエを殺してもってこい」と命令，それができなかった子どもを殴った。無抵抗の人々に対し，軍の威光をかさにきた山下はしたい放題だった，とされる。

やがて6月7月と暑くなるにつれ罹患者が急増する。死者も出始めた。このままでは全員が死ぬ。そう判断した当時の国民学校校長・識名信升は「斬るぞ」という山下の脅しをかわし，7月30日西表を抜け出して，石垣島に駐留していた日本軍旅団長へ直訴，帰島許可の取り付けに成功した。ついに8月はじめから順次帰島できることになった。

〈全島民の30%が死亡〉

波照間に帰ってから，マラリア蚊による本当のすさまじさが露わになる。全島民1275名中のほぼ99%，1259名にマラリアが蔓延したのである。その結果，12月までに461名，全島民の36%もが亡

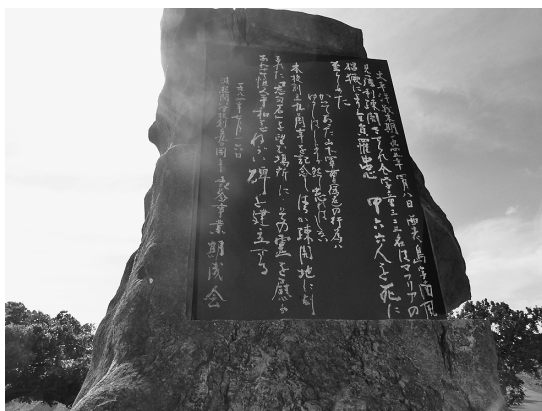


写真8 西表島に強制疎開の結果
マラリアに罹って亡くなった学童の慰霊碑

くなるという，恐ろしい事態になった。医療も薬もほとんどない。十分な看護も受けられず，連日死者が出る。40℃の高熱に子どもたちは顔を真っ赤にしてうなされ，震えを繰り返し，息を引き取っていく。そんな日々に幼児の半数が死んだ。ろくな埋葬もできず，食糧は常に不足，みんなが飢えている。

マラリア蚊による犠牲者は，60歳以上の8割，45歳以上の5割，未就学児童も5割という，途方もない数字にのぼった。小学生以上45歳未満の比較的体力のある年齢層でさえ，死亡率19%，ほぼ5人に1人が亡くなっている。

全沖縄住民のおよそ26%もが戦争で亡くなった。しかし，波照間「もうひとつの沖縄戦」による死者の数は，さらにそれを10%も上回っている。波照間の強制疎開による損失が，いかに途方もない数字であるかがわかる。

沖縄戦の日本軍壊滅は6月22日である。沖縄本島の牛島司令官が，この日に自決した。ではなぜ波照間に配置された，たった1人の兵が，そこまで島民に犠牲を強いたのか，という疑問が残るであろう。これを解くカギは陸軍中野学校という，スパイ・ゲリラ養成機関にある。山下虎雄（実名は酒井清ともいう）は，中野学校による「残置課者」だった。これは，正規軍による組織的戦闘が

崩壊した後も、「スパイとして、あるいは住民によるゲリラ戦を指導しつつ、密かにその地域に残り戦う」ことを使命として、内外の各地に送り込まれる、いわば最終兵器としての役割を担っていた。戦後アジア各地などから、10年以上もたってまで残存日本兵が帰還した。彼らのなかにもこれに該当するものがいた。あるいは戦争後も現地に居残ったまま、という未帰還兵にも同様な者が少なくないとされる。

〈誰も責任をとっていない〉

つまり山下は、識名校長の決死的直訴と、旅団長による波照間帰島裁可がなければ、全島民が死亡するまで、西表においてゲリラ戦を遂行するつもりだったかにも見えもする。それが「護郷隊」つまり、ふるさとを守るという名目のもと、ろくな武器も持たない島民たちを、無理矢理ゲリラ戦に引きずり込むという「作戦」だったとするなら、想像するだに恐ろしい。

戦後になっての山下の言い訳は、「命令で仕方なく」だった。まさに軍は、住民を守らない。これは兵士の側からさえ、多くの証言がある。山下自身もまた「上からの命令、自分も戦争の被害者だ」と言い抜け、訴追も免れた。戦争のさまざまな惨禍がなканずく沖縄において極端な形に現れているが、この山下という兵でさえ、のうのうと戦後生き延び平気で暮らした。「日本の戦争責任」という大切な点は、天皇から波照間の山下にいたるまで、戦後という時間の中で風化しつつある。そしてこうした無責任体制は、沖縄問題、公害、原発事故そのほか、重要な諸問題のたび、わが日本という国の中で、形を変えて繰り返されているのである。

波照間の人たちの戦後における山下評は、反山下と親山下にわかれた。疎開の地域によって、山下は住民に接する態度を変えていたようである。「分割して統治」と考えたかどうか。前者の中に



写真9 小学校の壁に描かれた「日本最南端平和の碑」の絵

は山下を殺そうと思った人たちがいた。後者の方に山下は、東京からちょっとしたおもちゃを運んだりして、子どもたちまで懐柔しようとしたという。しかし戦後に戦犯として、島民から「表立った告発」はなされなかった（新崎ほか、2011；石原、1990）。

3) 波照間・琉球の歴史年表

7世紀

『隋書』の東夷伝に「琉球国」登場

10～11世紀

原グスク時代

（石組みの拝所、城塞、各地に豪族）

13～15世紀

大型グスク時代、

あじ
按司と呼ばれる小領主、大型の本格的グスク造成、農耕が始まる

13世紀

琉球に文字、仏教伝来

14世紀

沖縄三山時代（北山、中山、南山）

1372年

明の使者、中山を訪れ、冊封・入貢を促す。このときの中山王は察度。以後500年にわたる朝貢関係が始まる、「琉球」といわれるのはこの

| | |
|---|---|
| 時から | 1776年 |
| 1390年 | この年から3年間連続凶作・飢饉、八重山の餓死・病死3733人 |
| 八重山、宮古とともに中山王府に入貢 | |
| 1421年 | 1853年 |
| 尚 ^{しょうはし} 巴志王即位 | ペリー提督一行のアール・ジョーンズ、西表で石炭発見 |
| 1429年 | 1868年 |
| 尚巴志王は、1427年の北山に次いで南山を攻め、琉球統一王朝（第一次尚氏王統）成立。 | 明治維新 |
| 1439年 | 1879年 |
| 福建省に泉州琉球館を起き、活発な海上交易を展開 | 日本政府「琉球処分」、450年の琉球王朝崩壊 |
| 1477年 | 1885年 |
| 第二次尚氏王統第3代尚真王即位（琉球王国の絶頂期、奄美から八重山までを版図に） | 三井物産、西表で石炭採掘開始 |
| 与那国に済州島人3人漂着。2年5カ月がかりで琉球を北上して帰国、『李朝実録』に当時の琉球の細かな観察が記録された | 1894年 |
| 1500年 | 1899年 |
| オヤケ・アカハチ（波照間生まれ）、王府への朝貢を断り反乱、首里王府・宮古（中曽根豊見親）の征討軍により討伐される | 沖縄からハワイへの移住開始（以後1939年までに：ニューカレドニアなど南洋方面へ3万2000人、ブラジル2万1100人、ハワイ1万9800人、ペルー1万2000人、フィリピン9000人）。 ＊現在の在外沖縄出身者は、世界におよそ40万人（資料提供：カルティバイト） |
| 1542年 | 1902年 |
| ポルトガル艦隊来航 | 人頭税廃止 |
| 1609年 | 1906年 |
| 薩摩・島津による琉球征服、以後王府は清と島津へ両属する | 波照間分教場が小学校となる |
| 表向きは清国の一朝貢国、実質は薩摩の従属国。「沖縄」という島名の使用はおもに江戸時代から | 1914年 |
| 1637年 | 八重山村が、石垣・大浜・竹富・与那国の4村に分村。竹富村は、竹富・黒島・新城・鳩間・西表・波照間の7つの字となる（竹富村の人口5662人、1057戸） |
| 八重山に人頭税賦課 | 1917年 |
| 1648年 | 八重山マラリアはくめつ期成会設立 |
| 波照間平田村村民40人、税の重圧から逃れるためニライカナイへ船出 | 1940年 |
| 1771年 | 沖縄の総人口57万4000人 |
| 明和の大津波、石垣・宮古合計1万2000人の死者。人口半減。竹富で874人が死亡・行方不明、石垣島は9313人死亡 | 1945年 |
| | 波照間から西表への全住民1275名強制疎開、1259人マラリア罹患、461人死亡 |

6月23日、日本軍再考司令官自決（沖縄戦終結、慰霊の日）
 7月2日、米軍沖縄戦終了宣言
 8月15日、日本敗戦
 沖縄県の推計人口32万7000人（当時）
 1948年
 米軍の認可により竹富村が「町」に変更（人口9387人、1746戸、当時）
 1951年
 サンフランシスコ条約、沖縄を置き去りにした日本の主権回復
 1960年
 波照間、簡易水道はじまる。75年、安定給水可能となるが、なお水質不安定
 1963年
 波照間、電気の供給開始、70年代に全戸へ普及
 1964年
 波照間の人口1425人、220戸
 1972年
 沖縄日本に復帰、沖縄県誕生。竹富町人口4515人
 1973年
 波照間の人口965人、223戸、はじめて1000人を下回る
 1976年
 波照間空港開港、南西航空就航
 1985年
 波照間、農村集落センター完成
 1989年
 波照間、かん水（くみ上げた地下水）淡水化施設完成
 1990年
 大型フェリー・貨物船就航
 1993年
 先島民放TV開局
 県立八重山病院・波照間診療所新築移転
 波照間客船ターミナル完成・供用開始

波照間星空観測タワー完成
 1996年
 波照間の人口598人、235戸、初めて600人を下回る
 石垣島から高速船就航（所要1時間）
 2001年
 波照間保険センター完成
 2003年
 波照間の^{しもたばる}下田原遺跡・国定史跡となる
 2004年
 海水の淡水化施設完成
 2006年
 小型焼却炉設置
 2007年
 ブロードバンド事業供用開始
 琉球エアコミューターをエアードルフィンに引き継ぐ
 波照間への年間観光客数2万555人
 2008年
 波照間への年間観光客数3万205人に跳ね上がる
 エアードルフィン運休
 2010年
 竹富町観光立町宣言
 波照間への年間観光客3万597人

3. 波照間での生活

波照間面積：12.77km²

海岸線延長：14.8km

波照間人口：523人（2013年）

1945時点では1256人だったが、46年の大旱ばつと47年の大型台風により住民の23%、289人もが離島した

国政調査による「竹富町」の人口推移：

1925年 9043人

1980年 3376人（過去最低）

2010年 3859人

月間平均気温：1月19.1℃（一番低い）

7月28.6℃（一番高い）

6～11月年平均4～5の台風が来襲

竹富町予算：47億円（自主財源：21.4%，依存財源：78.6%）

農家総数：114軒，うち専業47軒

（2005農林業調査，ほぼ全戸の45%を農家が占める）

水稲273 t

サトウキビ1万5787 t

（2008農林水産課）

飼育家畜数：肉食牛20戸438頭

山羊35戸241頭

（2010農林水産課）

登録漁船数：42隻

陸揚げ量：36 t

金額：2200万円（2009農林水産課）

高校進学：波照間中学卒業3名全員が進学（2011年）

宿泊機関：民宿16軒（223人収容），

旅館2軒（47人収容），ゲストハウス・ペンション・別荘など3軒（44名収容）

島外との交通機関：大型フェリー週5便，

高速船1日5便

定期空路なし

医療：波照間診療所

緊急の場合自衛隊ヘリが出動

（2013年：13回）

1）主な産業

波照間島では，どこにいても立派な背の高いサトウキビ畑を眺めることができる。波照間を訪れる人にとって，島一面に広がるサトウキビ畑は，

美しい海に引けを取らず印象的かつ魅力的であろう。サトウキビ畑は波照間には欠かすことのできない景色である。

サトウキビ畑は島の耕地面積の91%（平成16（2004）年度）を占めている。また，サトウキビ栽培に従事している人は人口のおよそ70%を占める。近年スイカやメロン，パッションフルーツなどの果樹等の栽培も行われているが，島の産業はサトウキビ栽培と製糖中心で支えられている。

波照間島では，ユイマールによるサトウキビの収穫が現在（2010年3月時点）でも行われている。ユイマールは「結い」の意味をもつ沖縄のことばである。農作業，家屋建築，冠婚葬祭などにおける相互扶助をいう。かつては，沖縄全体で見ることができたが，現在はほぼ使われなくなった。波照間島のサトウキビ栽培は1914年に石垣島から移植されたのが始まりである。かつて，波照間島は水稲，雑穀類，芋などを自給。カツオ漁とカツオ節生産により，現金収入を得ていた。しかし，カツオ節の価格低迷により新たな現金収入源を求め，製糖工場を誘致。61年に農家と大東糖業株式会社の出資により「波照間製糖株式会社」が設立され，63年には製糖工場が操業開始された。

サトウキビの収穫は12月から3月である。この時期の島が一番忙しい。製糖工場の社員はこの時期，24時間のフル操業体制で製糖される。波照間の製糖開始時期は通常年の場合12月上旬と，他の地域より1カ月程度早くなっている。そのため，国内の黒糖市場に速く出荷することが可能になるメリットがある。一方で，収穫が早まれば糖度が上がっていないサトウキビもあるため，糖度の測定は欠かせない。黒糖の製造は，原料の鮮度が製品の出来を直接左右するため，新鮮な原料の確保に気を使う。人々による丁寧な手刈り収穫は天候に左右されず，安定的な原料の搬入が可能となる。そうして，製糖工場は高品質な原料を確保しているのだ。計画的に収穫されたサトウキビは，原則

として当日中に工場へ搬入・処理され、収穫後の時間経過による品質低下が回避されている。サトウキビの収穫はおよそ年に1～1.6万t、ここからおよそ年に1500～2000tの黒糖が作られる。波照間島のサトウキビは高品質な上、糖度は沖縄で製造される黒糖をはるかに上回り美味しいと評判だ。島の売店はもちろん、石垣の離島ターミナル、お土産屋にも波照間の黒糖が並ぶ。黒毛和牛などの畜産も行われており、山羊も多く飼育されている。ほとんどがサトウキビとの兼業で飼育されている。

また、島内の酒造所では「泡波」という銘柄の泡盛を生産。製造量が少なく、ほとんどが波照間島内で消費されることから、入手困難な銘酒として有名である（入嵩西，1933；精糖工業会，1997；農林水産省，1999；『八重山毎日新聞』；『沖縄タイムス』）。

2) 教育

波照間には現在中学校までしかない。昭和30（1955）年代後半には450名余もいた児童生徒も、他のへき地校同様に減少し、2013年度は小学生が30名、中学生が9名となっている。また小学校は今年（2014）で120周年になる。

ここでは「島を愛し、共生、自立できるウタマ（島のことで「子ども」を表す）」を教育目標に掲げ、その達成に向けた取り組みを推進している。幼・小・中の連携と、「育てたい力」を明確にした教育実践を、取り組みの柱として展開。

しかし、島内に高等学校は存在しないため中学卒業後進学する場合には島外に出なくては行けない。進学先の高校は近くて石垣島、それ以外は本島などへの進学が大半である。

また、親にとっての負担も大きい。文化・スポーツ活動の交通費、大会や交流会がある度に島を出なくては行けない。そして高校へ進学させる場合、学費の他に仕送りや家賃等の負担があるため、



写真10 小学校に掲げられている教育目標

子どもを進学させるには本島よりも多額の費用が必要となるのが現状だ。

3) 売店やレストランなど

波照間における売店、および飲食店や土産物屋について紹介する。

最も島民の生活の基盤にあるのは、共同売店といわれる集落ごとにある売店である。

各部落に、「丸友売店」「南共同売店」「まるま売店」「名石売店」「富嘉売店」の計5店舗あり、集落の人々が交代で店番をしながら営業している。

飲食店としては、「たかな食堂」「浜シタン亭」「青空食堂」「花 HANA 食堂」「レストランなりさ」「ぺ～ぬ島」「パナヌファ」などの7軒があり、カフェとしては「仲底商店 café」「kukuru café」「そばカフェあとふそこ」「あやふふあみ」など4軒がある。島民も訪れる居酒屋には「はいさい」「あがん」「いでよ」の3軒があり、島民も観光客も一緒になって利用する光景が見られる。

土産物屋としては、波照間旅客ターミナル内にある「あだん」「仲底商店」「モンパの木」などがある。

4) 郵便・宅配・通信など

ここでの通信方法として、電話・インターネットのほかには、波照間郵便局がある。2007年3月

5日に八重山郵便局に集配業務を移管し、10月1日に民営化になった。

その後、2012年10月1日に日本郵便株式会社が発足。島外に輸送または輸入の頻度は週3回、安栄観光の貨物船で運ばれる。

また観光客向けに日本最南端の郵便局としての消印、オリジナルはがき、切手なども販売している。ただ、日本最南端の消印は窓口でしか押してもらえないので、注意が必要である。

5) 上水道の整備

生活には欠かすことのできない水。波照間島では、常に「節水」が呼びかけられている。波照間島はサンゴ礁の隆起でできた島であり、石灰岩質の土地であるために水はけが良く、水が地表に滞留しないで地中に染み込んでしまう。このため、川や池は形成されず、降水量が少ないとすぐに水不足・干ばつになる。八重山諸島は山が少なく、離島の多くは山のある石垣島と西表島から海底送水管を利用し水道水を送ってもらっている。石垣島と西表島からも遠くに位置している波照間島は、「波照間簡易水道海水淡水化施設」において、海水を逆浸透法一段脱塩法により淡水化し1日240tという生活水を作っている。

また、島には農業排水用貯水池が整備されている。農地の大部分はサトウキビ畑になっており、そこには給水システムと排水システムがある。農業排水用貯水池は排水路の末端に設けられ、そこに農業排水や雨水を貯めるようにしている。貯水池で砂を沈殿させてからポンプにより高いところにあるファームpondへ送られ、自然流下で畑まで届けられる。サトウキビ畑の周囲には給水設備があり、そこからホースで散水している光景を目にすることができる。

このような施設が作られる以前、波照間島は水源のすべてを石灰岩中の地下水に頼っていた。現在の集落は島中央のやや西北の上位段丘面にある。

ここは表面近くに基盤岩があり、石灰岩が薄く水が得やすく、いずれも数m～10m程度掘り下げることで泥岩層に達することができ、泥岩層の標高も30mと塩水が混ざる心配はない。しかし、1969年には簡易水道が作られたため、既存の井戸の利用度は減少。簡易水道も地下水を使用していたが、衛生的問題や台風後は水が塩辛くなることがあった。そのため、現在の淡水化装置により島民は美味しく安全な水を確保することができるようになった。

また、集落と水は密接な関係にある。北岸には、かつて人々が居住した遺跡が残っており、考古学的に最初に人が住み着いたのも、この水利の良さによっている。ただし、この地域は泥岩層との境界が海面より低いいため石灰岩層に海水が浸透しており、地下水に塩分が混じってしまう。これが、集落が沿岸部から島の中央部に移動する原因の1つとなった。島の伝説上では波照間の集落は富嘉集落から始まったとされている。富嘉一帯は泥岩層が一番浅く、井戸により容易に水が得られる場所だけに信憑性が高い。一方で、島の南半分は泥岩層が水面よりも低く、水を得るのに適さない。そのため、過去集落が形成されたことはなく、現在もまったくない（木崎、1985；古川、1981；来間、1982）。

6) 交通

島内に路線バス、タクシーはない。島の内陸部に集落と周囲の畑を囲むように約9kmの一周道路が通っており、車（時速40km）で約10分、自転車（時速11km）で約50分。起伏はさほどないが、集落部分から海岸線にかけてゆるやかな下りになっている。県道が通っておらず、一周道路と集落、港、空港の周辺はきれいに舗装されているが、農道は未舗装の砂利道がほとんどである。波照間港から集落までは約1.2km、車で約1分、自転車で約5分、徒歩で約20分の距離となる。宿泊施設や

レジャーショッップのツアーなどを予約している場合は、送迎をしてくれる場合がほとんどだ。そのため、島内の移動はほとんどの場合がレンタバイクかレンタサイクルとなる。また、現在はレンタカー屋が2軒あり、レンタバイク・レンタサイクルを各民宿が貸出を行なっている。

波照間島までのアクセスについては、現在船便のみとなっている。石垣島離島ターミナルと波照間港を結ぶ有限会社安栄観光の高速船と大型フェリーが公共交通手段である。

先述のとおり、高速船は1日5便あり、所要時間は約60分。不定期にて西表島大原港経由となり、西表島大原港経由の場合の所要時間は約80分。また、大型フェリーの貨客船フェリーはてるまは火・木・第2・4金・土曜日に運航しているが、所要時間は2時間半である。なお、高速船の波照間航路はおよそ半分が外洋のコースとなるため、黒島を過ぎたあたりから揺れが激しくなり、かなりの上下動がある。竹富町など他の離島への航路と比べ、荒天時の運休頻度が高い。

また、波照間島には空港があるが、現在は就航していない。日本最南端の空港であり、年間利用客数は国内1544人（2008年度）であった。しかし搭乗率の悪さから、石垣一波照間路線は2007年から廃止されている。ところが14年1月25日の八重山毎日新聞の記事によると、現在廃止となっている石垣一波照間、石垣一多良間の離島航空2路線について県は、15年10月に再開する方向で調整を進めているもようである。県が19人乗りの機材の購入を補助し、第一航空株式会社が運航する予定。県と竹富町、多良間村で構成する「石垣拠点空路線開設検討協議会」の第2回作業部会で確認され、3月下旬に最終の作業部会を開き、15年3月の協議会で最終決定を行う。機材はバイキングエア社のDHC ツイン・オッター。県の補助で2機購入し、1機を石垣一波照間、多良間に使用する計画だという。作業部会は航空機で物資輸送も検討し

ており、空輸の積載能力に限界はあるが、波照間への物資輸送に貢献できると期待している（木崎、1985；古川、1981；来間、1982；入嵩西、1993；山根、1963；精糖工業会編・刊、1997；『八重山毎日新聞』；神谷・山田；農林水産業、1999；『沖縄タイムス』）。

4. アンケート調査結果

1) アンケートの概要

調査旅行日程：2014年6月23日（月曜日）～7月1日（火曜日）

私たちは上記の日程で波照間での、アンケート調査を行なった。まず、波照間港から本島に出る船を待っている観光客の意見をいただいた。帰路前のアンケート調査を行うことにより、観光客の波照間に対する満足度を確認できるであろうという狙いである。また、波照間島内では全戸を回り、島民の意見を聞かせていただいた。結果全体の観光客アンケート総数は155枚、島民アンケート総数は173枚。32%という回収率であった。内訳・波照間の人口は以下の通りである。

波照間の人口総数（2014年現在）

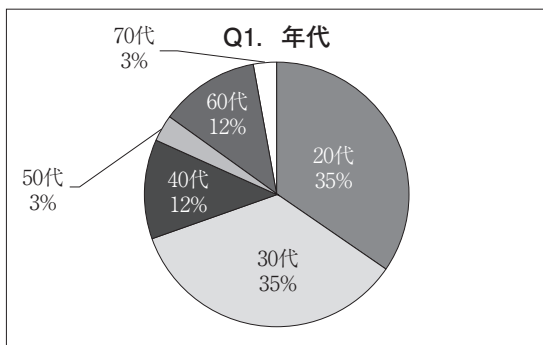
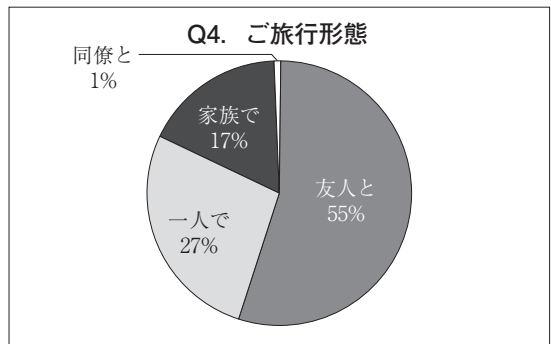
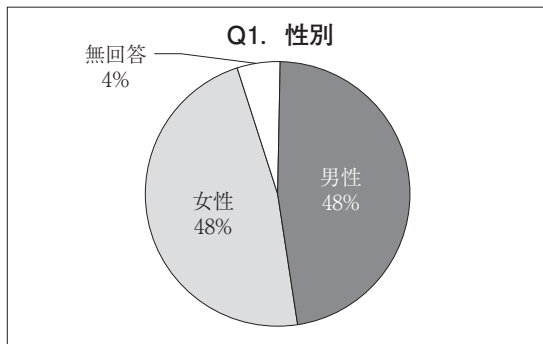
男性：283人 女性：253人
総人口：536人

島民の皆様からのアンケート回収数

男性：73枚 女性：90枚 未回答：10枚
〈総回答数：173枚〉

2) 観光客からみた波照間

〈総回答数：155人〉

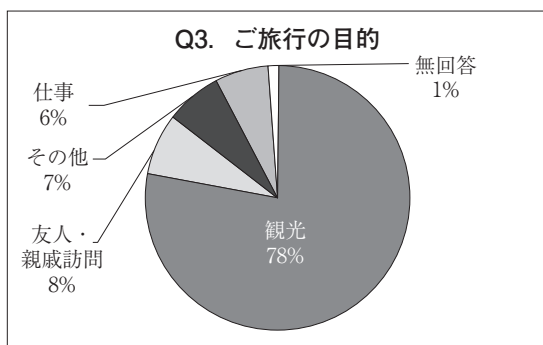
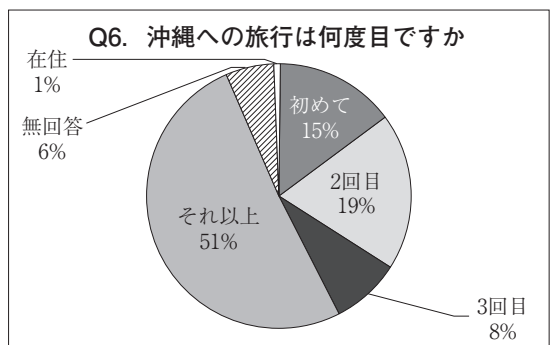
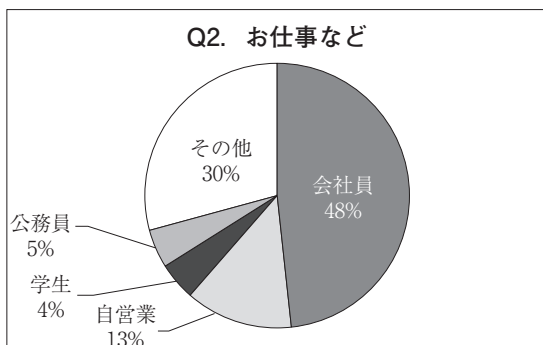


Q5. どちらから来られましたか。

東京30人, 大阪22人

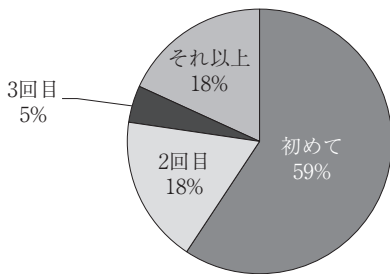
愛知11人, 兵庫10人, 沖縄10人

その他（千葉, 京都, 静岡, 石川, 福岡, 山形, 岐阜, 北海道, 滋賀, 埼玉, 岡山, 神奈川, 茨城, 長野, 奈良, 広島, 熊本, 徳島, 宮崎, 福島, 山梨）



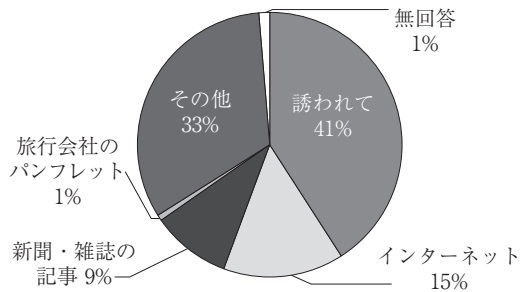
半分以上の人が沖縄への旅行は3回以上という回答だ。

Q7. 波照間へは何回目ですか



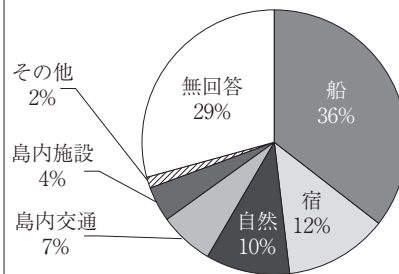
半分以上が「初めて」という回答。Q 6 のグラフと比較すると、沖縄に何度か訪れたことのある人が波照間に来ているということが分かる。

Q8. 波照間訪問のきっかけは



「誘われて」という回答がトップとなった。数値を見る限りでは、広告媒体などを見て訪れた人は少なく、口コミなどの影響が大きいのであろう。

Q9. 波照間観光の不満足だったことは



【島内交通】 標識が少ない、交通手段が少ない

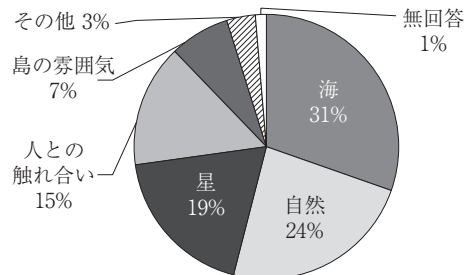
【島内施設】 飲食店が少ない、営業時間が短い

【船】 船便の欠航が多い、船が揺れる、船が暑い

【宿】 宿が汚い、宿をとるのが難しい

※無回答には「不満足なし」という回答も含む

Q10. 波照間観光で一番よかったことは



【海】 西浜が美しい、サンゴ礁、シュノーケルなど

【自然】 景色、空、環境など

【星】 満天の星、天体観測所、流れ星

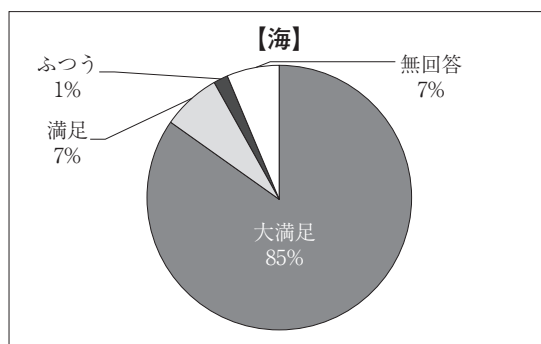
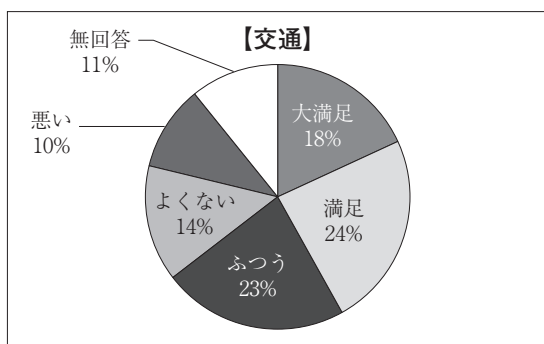
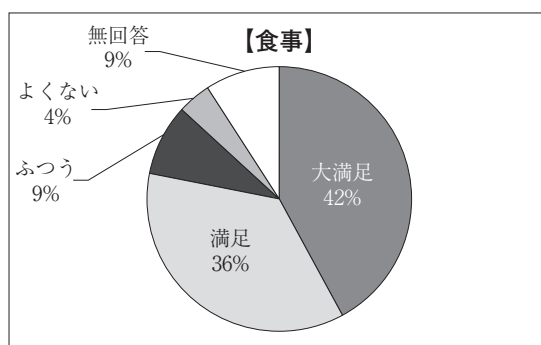
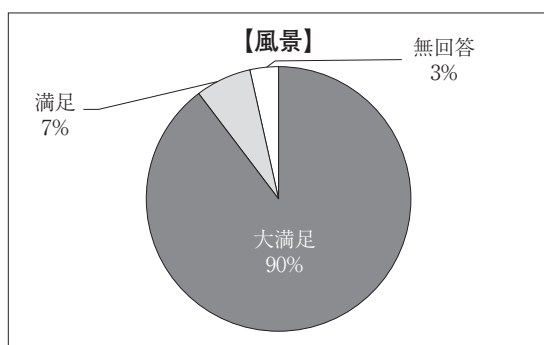
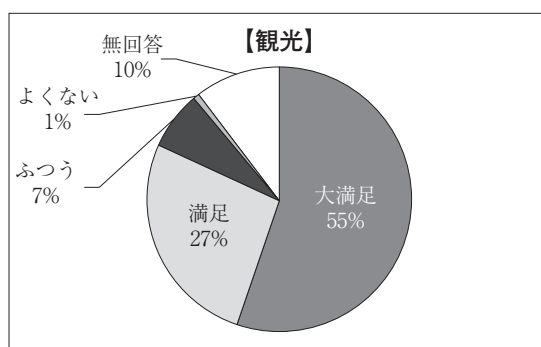
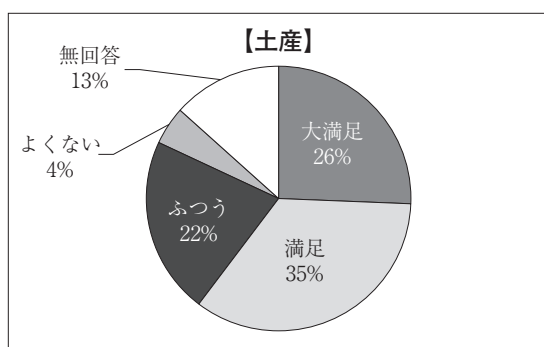
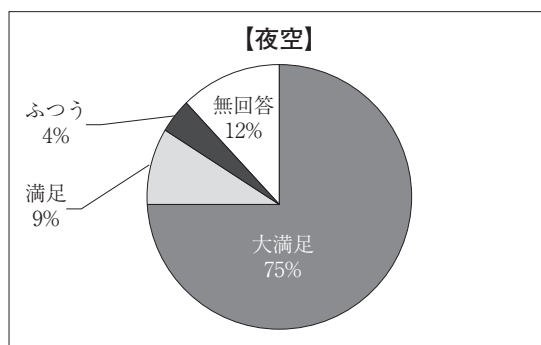
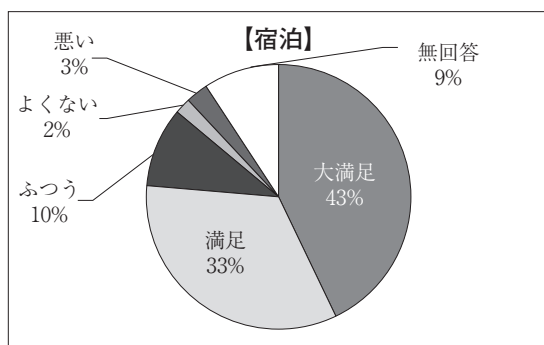
【人】 島の人がいい人、人との出会い

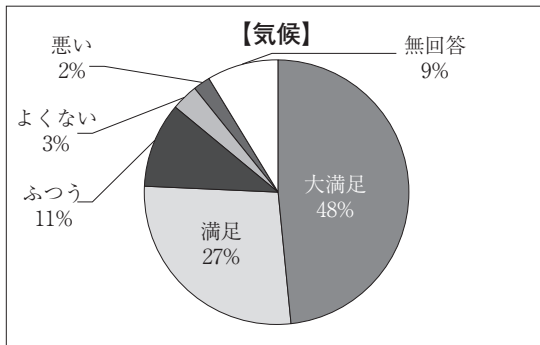
【その他】 食事の美味しさ、ゆんたく

※「ゆんたく」とは沖縄の方言で「お喋り」という意

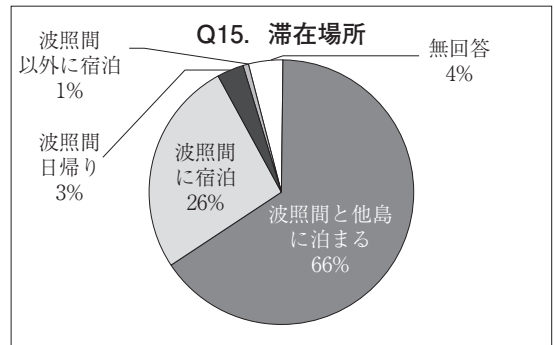
約 9 割の人が80%以上の満足度を得ている。

Q12. 個別の満足度

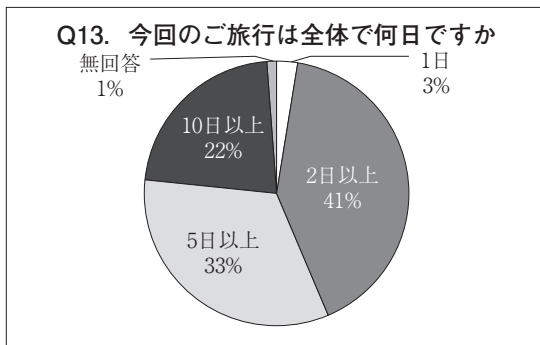




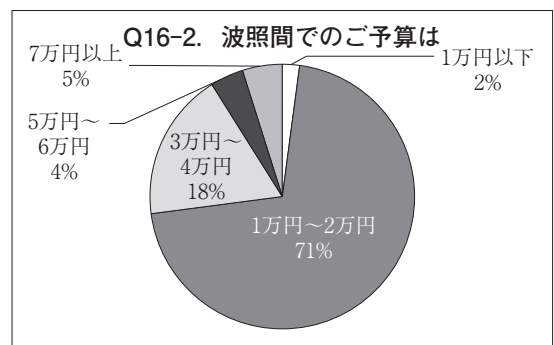
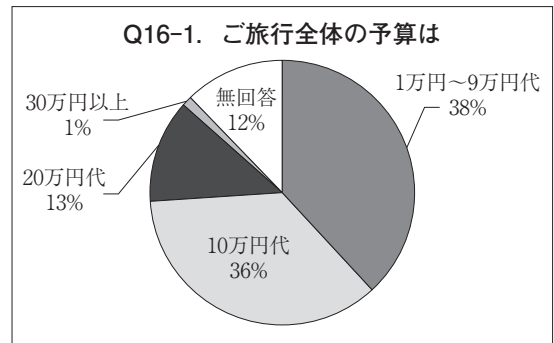
全体を通して、風景・海・夜空などの自然資源は十分に観光客の心をつかんでいる。観光での満足度は50%を超えているものの、交通・土産などは改善の余地ありと見てとれる。観光としては満足度が非常に高い。



船便欠航が連日続いたため、数値は日帰り客が少ないが、中には日帰り予定だったがやむなく宿泊した人も少なくない。

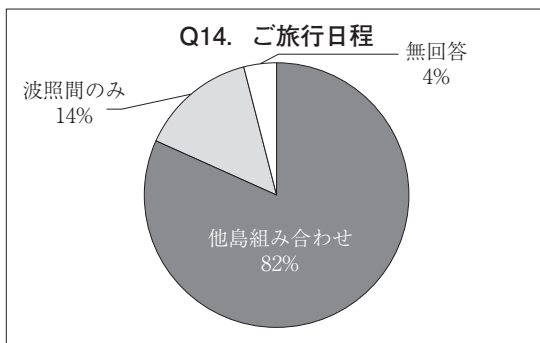


短期間の旅行が約4割を占めた。だが、半数以上は5日以上 of 長期間の休みを利用して訪れる人がある。

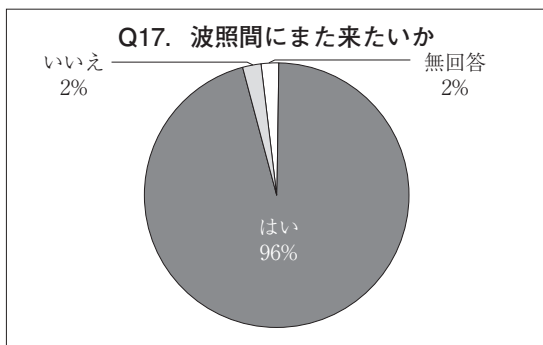


全体での予算が10万円代までが7割を超えているにもかかわらず波照間での予算が1万円～2万円代が7割という結果である。

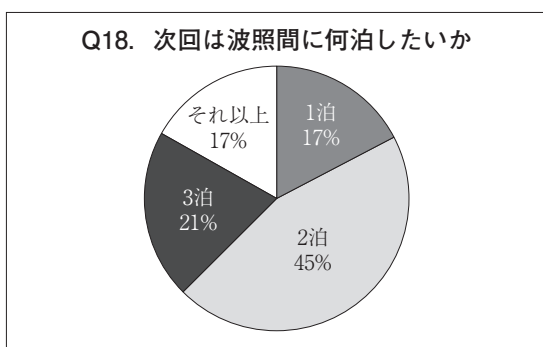
他島との組み合わせで訪れる人が大半であるために、約9割がほかの島の予算となっている。



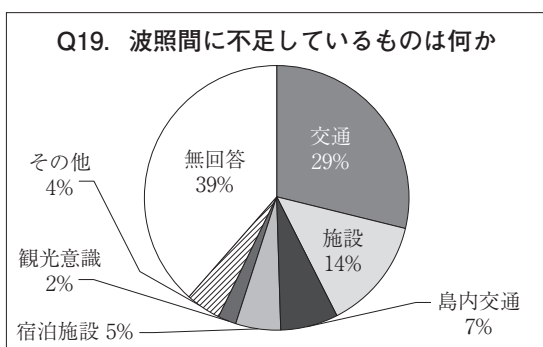
約8割の人が他島の組み合わせで訪れている。八重山諸島をめぐるケースが多いのであろう。



9 割以上の人がまた来たいという回答。リピーターになる要素は十分に備えている地であるというのが見てとれる。



2 泊以上の回答が 8 割を占めている。滞在日数を延ばしていくのは可能である。



【交通】交通機関，船の便数，安定した船の運航

【施設】食事処，コンビニ，売店，自販機，レジャー施設，薬局，土産物屋

【島内交通】道路案内表示，移動手段，マップ

【宿泊施設】宿泊施設，キレイな宿など

【その他】波照間の名産品と広告，ネット環境，英語対応，殺虫剤や虫撃退アイテム，現在のままでいてほしい

Q20. 波照間の観光や島に望まれることがありますたら，何なりとお書きください。

【交通関連】

- ・フェリーの運航率の向上，安定
- ・民宿もきれいで全体的に満足だが，帰れるか不安が続いた
- ・飛行機が飛ぶようになればいいと思う
- ・アクセスが良くなれば最高

【自然】

- ・西浜の管理人が必要
- ・きれいな海を残してほしい。旅行が不便だと海もきれいなような気がする。
- ・砂糖工場の夜のライトを消してほしい，星が見えない
- ・今のままで自然の形を残してほしい

【宿】

- ・宿の予約をとりやすくしてほしい
- ・宿泊施設の力入れ方に差がありすぎと感じたが，それ以外は島の何もない自然が波照間の良さであり魅力であると感じた

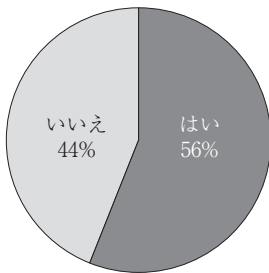
【その他】

- ・不便くらいがちょうどよい
- ・ずっとこのままでいてほしい
- ・観光化していない方が良いので，個人的には今のままで構わないと思います
- ・もっと観光客が集められる場所だと思います。観光客が増え，船がちゃんと出れば島も賑わうと思うのに
- ・何もない波照間らしさが好き

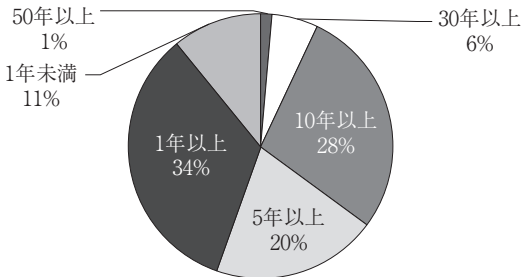
3) 島民からみた波照間

〈総回答数：173枚〉

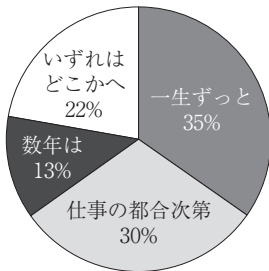
波照間生まれですか



波照間にどのくらいお住まいですか

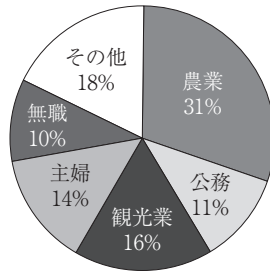


どのくらいお住まいになる予定ですか

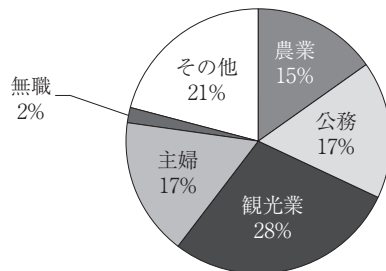


グラフを見ると、1年以上の割合が最も高く、近年になって波照間に移住してきた人が多いことがわかる。街頭調査をしていると、意外にも出張で波照間に来た人が見受けられた。

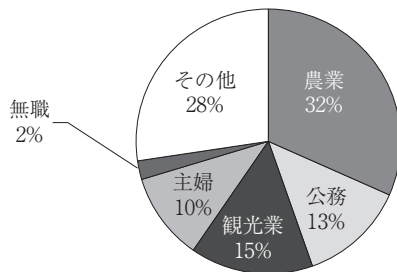
職業



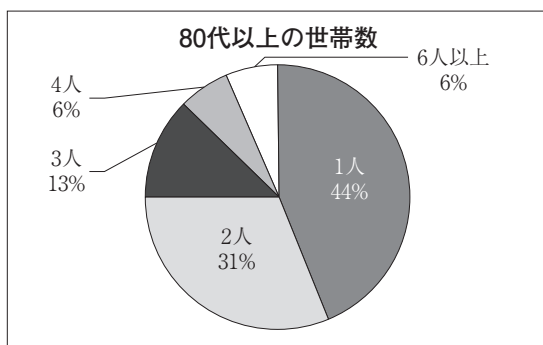
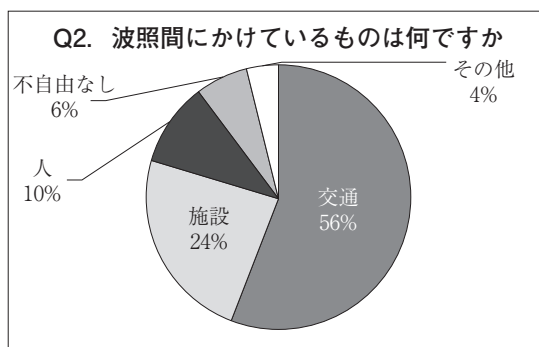
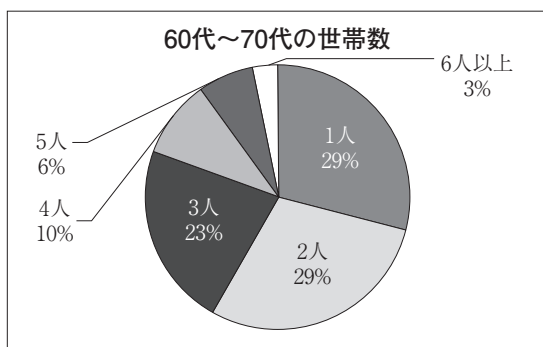
20代～30代の職業



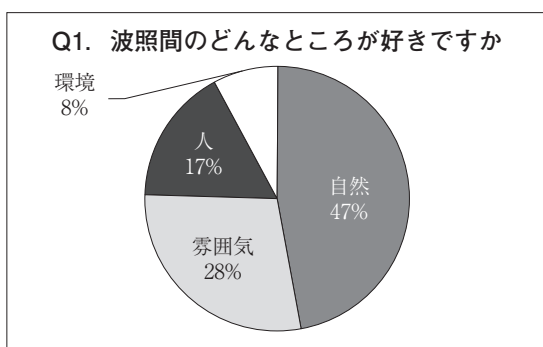
40代～50代の職業



上記の2つのグラフは年代別職業の割合を示している。20～30代のグラフを見ると、観光業に従事する人の割合が3割と最も高い。比較的若者が島の観光について、興味関心をもち、観光地としての波照間の発展を見据え、動き始めていることが読み取れる。40～50代のグラフを見ると農業がおよそ3割を占める。この農業のほとんどがサトウキビの生産である。



60～70代では、1人または2人暮らしで半分を占めるが、80代以上では60～70代に比べると一人暮らしの割合が4割を超えている。老年人口の孤独死が増加する恐れがあるという深刻な問題に繋がる。

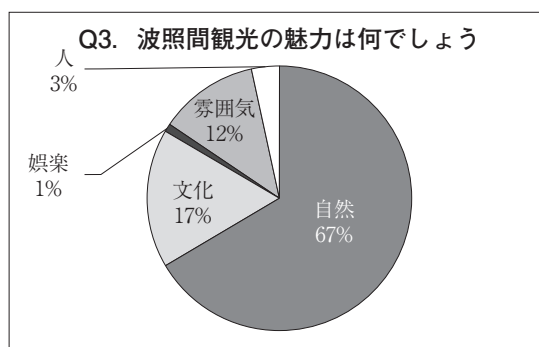


口頭質問によるコメント

- ・昔とあまりかわらないところ、何もないところ (50代・男性)
- ・海がきれい、星がいっぱい見られる。子供をのびのび育てられる (30代・女性)

口頭質問によるコメント

- ・恒常的な海路（船便）安心・安全・安価な交通手段 (20代・女性)
- ・観光客に対する店や飲食店など (60代・女性)
- ・島民の性格がおとなしい、島民がもっと島の良さをPRできたら、もっと良さが広がってくる (40代・男性)
- ・特になし。現状で良くも悪くも波照間らしい (30代・女性)



口頭質問によるコメント

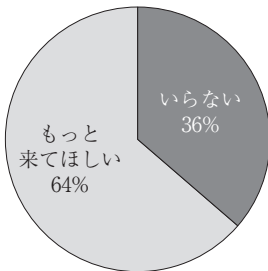
- ・海、星、そんなに観光化されていなく、何もないところ。日本最南端という魅力、最も南だから何かがあるだろうと思わせる魅力 (30代・男性)
- ・観光地っぽくない素朴な雰囲気があるところ (30代・女性)
- ・最南端でのんびりできる。南十字星が見え、豊かな自然と、人が素直であるところ (70代・女性)

観光客は現状のままで良いという回答が半数を占める結果となった。

しかし、観光客増加による経済効果を望む意見は7割と多い。

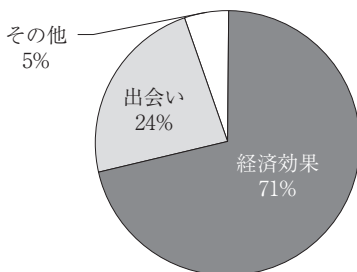
観光客の数を増やすのではなく、旅行者個人の滞在時間を増やし、消費金額を増やすことがいちばんの近道だと考えられる。

Q4. 外国からの観光客に来てほしいか



半数以上の人外国からの観光客に来てほしいと考えている一方で、いないという声も挙がった。その理由として、治安の悪化や言葉が通じないなどの意見があった。

Q5. 観光客が増えて良いことはなにか

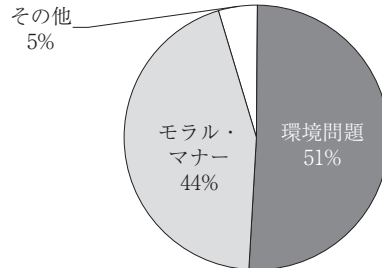


口頭質問によるコメント

- ・人的交流や、いろいろな価値観に触れられるのが良い（50代・男性）
- ・経済でのうるおい、嫁不足に役立つ（50代・男性）
- ・観光産業の活性化、PRになる（70代・女性）
- ・観光客と話ができるので子供たちにとっては良い（80代・女性）

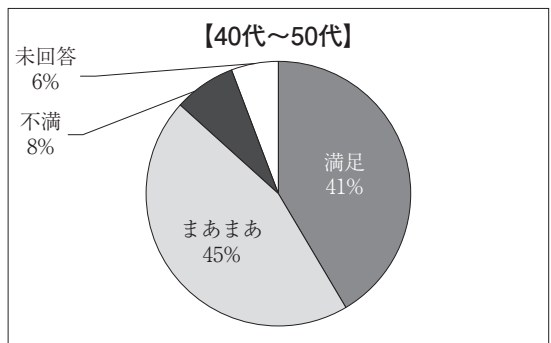
- ・経済的に潤うこと。島の存在を知ってもらえること。気に入って移住しようとする人が増える可能性があること（30代・女性）

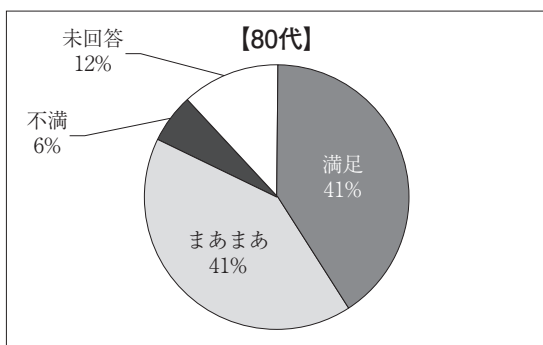
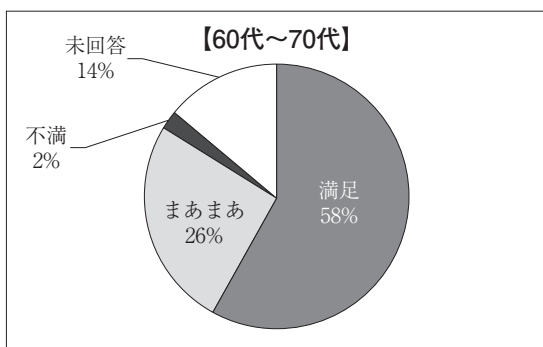
Q6. 観光客が増えて心配なことはなにか



- ・表面的な一時の経験で、島全体の評価をされてしまうこと（30代・女性）
- ・生活の場が脅かされる。連絡船に乗る際に高齢者や妊婦や子供の安全な席を確保するのが難しくなる（50代・男性）
- ・電熱と水が消費される（30代・女性）
- ・田舎だから何をしても許されると思っている感覚（40代・女性）
- ・都会と同じおもてなしを要求されること（30代・女性）
- ・マナーの悪い人が増え島の子どもたちに悪い影響を与える（50代・男性）

Q7. 波照間の暮らしに満足していますか





9割の人は、今の暮らしに満足していることがわかる。島民の意見では、自ら望んで住んでいるからという意見が多かった。

1割の島民の方は「不満足」という回答があるが、交通の便が影響しているようだ。

口頭質問によるコメント

満足

- ・自分が望んで住んでいるから (60代・男性)
- ・食べ物を自分たちで作ったりできるから (80代・女性)
- ・静かでのんびり過ごせるから (70代・女性)
- ・そのように暮らしたいと思って移り住んだから (60代・女性)

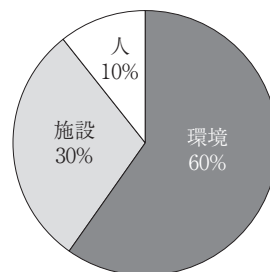
まあまあ

- ・戦後生まれと戦前生まれで島がどう変わっていくのだろうかと考えてしまう (80代・女性)
- ・船の欠航が多い、飛行機が速く飛んでほしい (70代・女性)

不満

- ・行事等の集まりが多い (30代・女性)
- ・石垣までの往復料金が安い (30代・女性)
- ・交通アクセスが船だけなので思うように石垣での用事を済ませられない (30代・女性)
- ・収入が少ない (50代・男性)

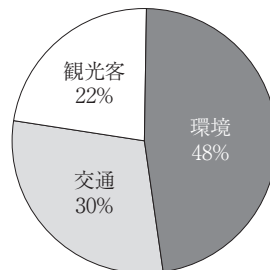
Q8. 波照間の昔と今を比べて良くなった点



口頭質問によるコメント

- ・共同売店に活気が出た (50代・男性)
- ・流通により、必要な物資がほとんど手に入るようになった (50代・男性)
- ・農業が機械化により、作業が楽になった (70代・男性)
- ・情報が得やすくなった (40代・男性)
- ・街灯が増えた (50代・男性)
- ・生協がきて、飲食店も少しずつ増え島が活性化してきている (30代・女性)

Q9. 波照間の昔と今を比べて悪くなった点



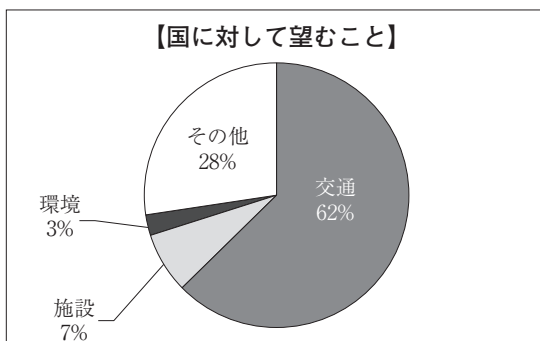
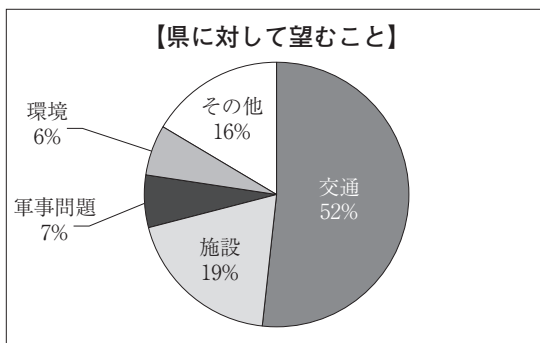
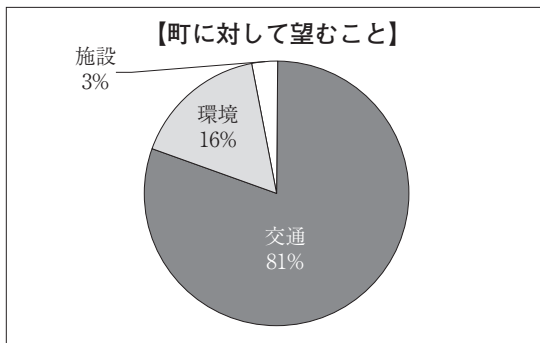
口頭質問によるコメント

- ・観光客が増え、勝手に家の写真などを撮ること (50代・女性)

- ・島行事が減った（50代・男性）
- ・土地改良により自然が減った。また、海も汚れ赤土の流出。（40代・女性）
- ・海で魚介類が取れなくなった。サンゴの白化も進んでいる（30代・女性）

昔と今を比べると、環境面で便利になったという意見が多かった。物資の供給が増え、生活が便利になったようだ。

Q10. 行政に望むことは？



口頭質問によるコメント

【交通】

- ・子供たちのために信号や安全標識を設置してほしい（70代・女性）
- ・外周道路を県道にしてほしい（50代・男性）
- ・船は国道と同じなので補助金をもっと出してほしい（30代・女性）
- ・空港再開。また飛行機を飛ばしてほしい（30代・女性）
- ・波照間の波に対応した船や、安定した交通の便が欲しい（80代・女性）
- ・波照間～石垣間の運賃を安くしてほしい（50代）

【施設】

- ・町営住宅を増やしてほしい（30代・男性）
- ・老人介護施設を増やしてほしい（50代・男性）
- ・公共施設の老朽化が進んでいるので立て替えてほしい（30代・男性）
- ・港の整備をしてほしい（50代・男性）

【環境】

- ・子供たちが戻ってきても生活できる仕組み（50代・男性）
- ・働ける場所が欲しい（70代・女性）

【軍事】

- ・米軍を来させないでほしい（70代・女性）
- ・国境の島であるということを意識して考えてもらいたい（30代・男性）

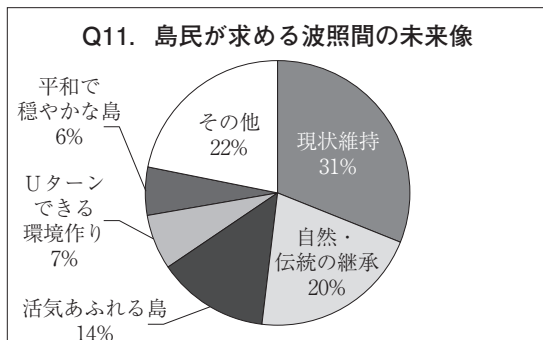
【その他】

- ・太陽光発電を取り入れてほしい（30代・女性）
- ・島外進学への援助をしてほしい（70代・男性）

町、国、県すべてにおいて半分以上が交通面での改善を望んでいることがわかる。交通の中でも一番多かった意見が船便や船の安定化について行政に改善を求める声が多かった。

続いて環境面、施設面とさまざまな意見が挙がったが、県に対しては軍事問題もいくつかの意見

があった。いずれにおいてもこの先の波照間の将来をしっかりと見据えた、安全で快適な、住みやすい島にしたいという島民の方の願いが見てとれる。



口頭質問によるコメント

- ・Uターンの子どもたちが安心して帰って来られるように住むところを作ってほしい (30代・女性)
- ・Uターンの子どもたちが、島外で得た能力を発揮しつつ島らしさを壊さないよう、島を盛り上げてほしい (30代・女性)
- ・過疎化にしないでほしい (60代・男性)
- ・このまま変わらず、自然体で昔ながらの沖縄を大切にしていきたい (20代・男性)
- ・自然豊かで、のんびりできるような島 (50代・女性)
- ・観光、産業、自然が共有する島 (40代・男性)
- ・途絶えつつある方言をなくさないでほしい (20代・女性)
- ・島の人たちの手で作る産業などで潤うこと (30代・女性)
- ・子供たちがのびのび育つ島、老若男女すべてが住みよい島 (40代・男性)
- ・無農薬の島にしたい。地下ダムを造り、地下水をくみ上げたい (50代・女性)
- ・観光業に頼らずとも、1次、2次産業で充分に自立できる経済体制になってほしい (50代・男性)

- ・平和で穏やかに暮らせる島 (60代・男性)
- ・観光産業に観光を取り入れてほしい (50代・男性)
- ・今まで通り、人同士が調和、共感しながら、繋がっている島であり続けてほしい (60代・女性)

この質問においては、島民1人ひとりが違った波照間に対する理想像があることが明らかになった。波照間の現状を維持したいという人もいればさらなる発展、開発に期待する人もいる。いずれにしても波照間島民は将来像について真剣に考えている。

4) 小中学生からみた波照間

小学生〈総回答数：39枚〉

Q1. 何年生ですか

| | |
|----|----|
| 1年 | 10 |
| 2年 | 7 |
| 3年 | 6 |
| 4年 | 4 |
| 5年 | 9 |
| 6年 | 3 |

Q2. 何人家族ですか

| | |
|-----|----|
| 3人 | 3 |
| 4人 | 7 |
| 5人 | 11 |
| 6人 | 7 |
| 7人 | 4 |
| 8人 | 1 |
| 9人 | 4 |
| 11人 | 1 |
| 15人 | 1 |

Q3. 波照間の好きなのところは何か

海 13 (小1, 3, 4, 5)

ニシ浜 11 (小1, 2, 3, 5, 6)
 星空 2 (小2, 5)
 人が少ない (小5)
 自然 (小5)
 住民が優しい (小4)
 多くの観光客が来るところ
 魚釣り (小3)
 最南端ということ (小1)
 黒糖美味しい (小3)
 みんぴか (小1)
 名石売店 (小1)
 暮らしやすいペンション最南端 (小1)
 公園で遊ぶ (小2)
 観測タワーがある (小2)
 南十字星が見える (小2)
 亀がいるところ (小2)
 大きい魚がいる (小3)
 行事 (小5)

Q 4. 将来の夢は何ですか

花屋さん 2 (小3, 4)
 船長 2 (小2, 3)
 ケーキ屋さん 2 (小1)
 野球選手 (小1)
 バスケット選手 (小4)
 歯医者 (小3)
 教員 (小3)
 酒屋 (小3)
 飼育員 (小1)
 ハンバーグ屋さん (小1)
 ペットショップ店員 (小1)
 ひまわりカフェ店員 (小1)
 ガス屋さん (小2)
 電力会社に就く 2 (小2)
 キャラクター (小2)
 パン屋さん 2 (小2)
 作曲家 (小3)

歌手 (小5)
 サッカー選手 2 (小4, 5)
 パイロット 3 (小1, 5)
 介護福祉士 (小5)
 父の後継ぎ (小5)
 FBI (小5)
 ゲームクリエイター (小5)
 保育士 3 (小1, 5)
 幼稚園の先生 (小2)
 パティシエ 2 (小5)
 医者 2 (小6)
 母の後継ぎ (小6)

中学生〈総回答数：6枚〉

Q 1. 何年生ですか

1年 2
 2年 4
 3年 0

Q 2. 何人家族ですか

4人 2
 5人 2
 6人 1
 8人 1

Q 3. 波照間の良いところ・自慢したいところ

海が綺麗 6 (中1, 2)
 星が綺麗 2 (中1, 2)
 自然豊か 1 (中1)
 昔の家が多く残っている (中1)
 みんな元気で明るい (中2)
 みんな優しい (中2)

Q 4. 波照間に欲しいものは何ですか

コンビニ 2 (中1, 2)
 スーパー (中1)
 スポーツ専門店 (中2)

映画館 2 (中2)

プール (中2)

ない (中1)

5. 卒業したらどうしますか

進学する 6

進学しない 0

Q 6. 卒業後はどこに住みたいです

波照間 0

内地 0

その他 0

石垣 4 (中1, 2)

沖縄本島 1 (中1)

外国 1 (中2)

Q 7. 将来就きたい仕事は何ですか

公務員 2 (中1)

CA (中1)

ない 2 (中2)

スポーツ関係 (中2)

イラストレーター (中2)

漫画家 (中2)

Q 8. 将来波照間に戻ってきますか

はい 1 (中2)

波照間生まれだから (中2)

家族がいるから (中2)

いいえ 5 (中1, 2)

石垣島で生まれたから

波照間以外のところに住みたいから (中2)

Q 9. 波照間への観光客は

これ以上来て欲しくない 0

もっと来て欲しい 4 (中1, 2)

わからない 2 (中1)

Q10. 波照間への外国人観光客は

来て欲しい 3 (中2)

来て欲しくない 0

わからない 2 (中1)

※記入なし 1 (中1)

Q11. 波照間への外国人観光客はどこの国から来てほしいですか

アメリカ 6

Q12. 外国へ行きたいですか

はい 4 (中1)

広い世界をもっと知りたい (中1)

外国の文化を知っておきたい (中2)

面白そう (中2)

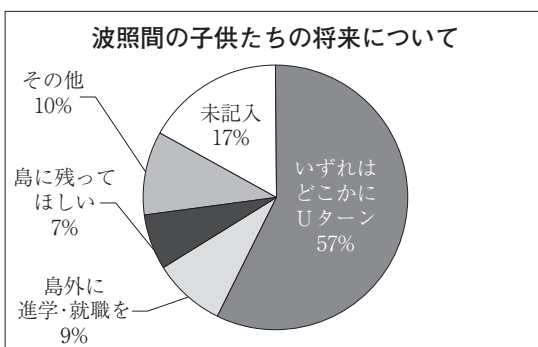
英語が好きだから (中2)

いいえ 2 (中1)

言葉が通じない (中1)

不安だから 2 (中1, 2)

Q12. 波照間の子供たちの将来について



このように親と子供の意見は異なる。子どもは将来波照間を出て生活したいということがわかる。しかし親は島に戻ってきてほしい世帯が多くみられる。子ども達と親の考えが異なる。

5. インタビューからみる波照間

波照間でお世話になった民宿「やどかり」には、波照間・超リピーターと思しき人たちがいつも数人滞在している。民宿を経営してるのは、70代半ばの「オバア」ただ1人である。やどかりには和室が4つと、プレハブ別棟の8人部屋があった。定員は詰めて20人。でもオバアいわく、混んで来たら廊下にも泊まってもらうから、大丈夫だと。つまり常連客が多いから、お互いあまりやかましいことは言わない、ということらしい。和室といっても、じっさい障子やふすまは開けっ放し。プライバシーなどほとんど誰も気にかけてはいない。民宿の居間というカリビングというか、台所でもあり食堂も兼ねる土間がある。廊下への上がり端にオバアはいつもべったり座って、タバコをふかしている。旦那さんはと聞くと、那覇の病院でターミナルケア中だと言った。「もうメンドーでねえ」としごくあっさりである。

オバアはどこへ出かけるにも、ホンダのスーパーカブみたいな古いスクーターに乗って行く。くたっとした洗いざらしのムーニーに、前掛けをしめて。裾をひらひらさせながら、たとえ歩いて3分ほどの共同売店へでも、ヘルメットを律儀にかぶって出かける。もう膝が痛くてねー、と苦笑いだ。

やどかりでは食事は出さない。客同士が勝手に鍋をひっくり返したり、菜を刻んだりすることもある。共同売店で買ってきた弁当が、いつも机の上に置いてある。誰がいつどう食べるのか、よくわからない。冷蔵庫の中には、ビールのパックもある。いつか誰かが飲み、またいつか誰かが補給する。きわめてテキトーである。そして一日中いつも、この食堂にはいつも誰かが、たむろしている。シャワー使ったら100円ね。自転車？ 300円。

オバアが領収書を切ったりする姿は、ほとんど見かけないといっていいだろう。オバアがつくるサータアンダギーという揚げ物のお菓子も、なくなりそうになるとまた、器一杯に盛られている。

リピーターたちが一日中何をして過ごしているのか、よくわからない。午前中ずっと、オバアと話していることもある。ワンボックスカーで、港にお客を迎えに行くのも、彼らの役目だ。オバアの下知に、「はいよー」とごく素直である。昼間に部屋を覗くと、寝っころがって本を読んだり、昼寝をしていることもある。近くの食堂で昼飯を食べ、ニシ浜にシュノーケリングに連れ立っても行く。夕方からは外のテーブルで、ビールを飲んだり、泡盛をすすったり、時に夜中まで、しごく気ままな数日を過ごし、いつの間にかいなくなる。「あー、きのう帰ったわ」とオバアも気にしてはいないようだ。リピーターたちは、ごく自然にオバアの手伝いをする。そういう客がいつでも誰かいる。

つまり彼らとオバアの関係は家族みたいになっているのだ。オバアの実の子供たちは、本土などに行ったまま、ほとんど帰っては来ないらしい。このリピーターたち何人かのプロフィールを紹介する。

1) 広島市の郵便局員

Yさんとしておこう。40代半ばで坊主刈り、眼



写真11 オバア手作りのサータアンダギー

鏡をかけて飄々としているから、私服で遊びに来た坊さんの見習い、といった風情がある。もう何回やどかりに来たかわからない。休みが取れるたび、夏は波照間、冬は石狩の民宿に通う。別に何をするという目的もない。強いて言うなら、オバアに会うことか。もっと若いころは日本中をバイクで回っていた。「ニシ浜の美しいサンゴ礁はいつまでも見飽きることがありません。沖縄でも一番じゃないですかねー」とにこにこしている。国連による2013だったかの調査では、オーストラリアのグレート・バリア・リーフより、沖縄のサンゴ礁の生態系の方が豊かだという結果が報じられた。シュノーケルだけで、やたらに美しい海の中が見られる。

夕暮れ時、ビールを飲みながら外のテーブルで何をするでもなく、サトウキビが風に揺れる音を聞いている。

2) 福島県いわき市の女性

銀行の窓口か、スーパーのレジか、Aさんはどこにでも居そうな雰囲気であって目立たない。30代前半であるらしい。いつもひっそりしているのだが、皆の会話に参加しないわけではない。やはり毎年やどかりにやって来るから、Yさんとも仲間だ。時間の使い方もYさんとよく似ている。24時間を気ままに過ごす。何が目的で来るかと言われてもねーと、途方にくれるふうである。「とにかく波照間にいる時間が好き、としか言いようがないわ。お金も使わないし、服だって水着1枚あればいい」。スリムな体に化粧っ気はゼロ。

ゼミの仲間が熱中症で唸っていたら、真夜中にさっさと、診療所まで車で送迎してくれた。

3) 大阪のサーファー

Oさんは年季の入ったサーファーである。もう10年以上ボードを抱え、世界中の波に乗ってきた。オアフのノースショア、カリフォルニア、南オー



写真12 大阪のサーファーOさんとお嫁さん

ストリアの海岸へ打ち寄せる南極からの大波。あるいはナミビアへの大西洋の波。誰だって、サーファーなら1度は、と夢見るところはすべて。

昨年のことだ。ふらりとニシ浜をみて覚悟が決まった。「ここで結婚式を挙げよう」。そして、お嫁さんと両方の親兄弟だけでやってきた。お嫁さんは朝早くから、純白のウェディングドレス姿になって、やどかりの土間に現れた。ミスマッチも甚だしい光景に、皆があぜんだった。しかしかれらはにこにこ、歩いてニシ浜まで行った。牧師がいたわけではない。きれいな砂浜で愛を誓い、指輪を交換。カメラマンは弟さんである。ビーチに遊びに来ていた皆が立会人、参会者。うつくしいビーチに、うつくしいカップル。皆の幸せが一緒になった。

ところでサーファーにとって、世界一の波はどこだったのか。回答はなんと宮崎の日南海岸か、種子島。後者には特に、島の四方からこの上ない波が打ち寄せてくる。これは意外なポイントだった。

4) アムステルダムから来た青年

波照間から石垣に帰るフェリーの中で、髪ぼうぼうの青年が高価そうなカメラを抱え乗っていた。よく見たら、けっこう整った顔立ちである。ナニ人かと尋ねたら、アムステルダムから来たという。



写真13 アムステルダムから来た青年

27歳。名古屋の大学を卒業し、日本を旅して八重山が気に入った。それで石垣の観光会社で働かせてもらっている。今日は朝の高速船でニシ浜に来て、2時間サングの海で遊び、この船で日帰りだと言う。世界のいろいろなところを見てきたけど八重山がいいと、不自由のない日本語である。しばらく風に吹かれベンチに寝っころがっていたが、新城島が見えてきたあたりでむっくり起き上がると、緑、藍、青、紺、ラピスラズリ、ターコイズブルー……なんとも形容のし様がな透明な海の色に魅せられたように、彼は写真を撮りはじめた。

4人のインタビューをもとに、波照間におけるリピーター層がどのような人々か、イメージを持ってもらえただろうか。彼らに出会い波照間を見て、感じたことを以下に簡単にまとめる。

- ① 何もないこと。観光とかなんとか、まるで無関係のような「素」のよさ。無垢、と言い換えていいかもしれない。観光客目当ての、人工的あれこれ、ハコモノなどがほとんど目につかない。
- ② 日本の最南端。この地域特性は唯一絶対である。しかも、北より南の方が一般の人気を得やすい。私たちが波照間を研究対象に選んだのも、この地理的特性が最も大きな理由だった。

- ③ 海。船が島に近づくにつれて濃く薄く変わる海の色、あるいは丘の上から見下ろす目も覚めるようなグリーン、青、黒っぽい縞模様まで。さらに水の中を覗いて見れば想像もしない別世界である。
- ④ 風。島一面のサトウキビの葉を、常にサワサワと風が揺らしていた。日中でも木陰がありさえすれば、涼しく感じさせてくれる。
- ⑤ 夜空。これはまたなんという星の数。中点には天の川が、白い雲のように横たわる。オバアがペンライトみたいなポインターで、あれがオリオン、あれが北斗七星、とさしてくれるのだが、天の川を初めて見たと絶句しているものもいた。冬なら水平線上に南十字星が見えるという。
- ⑥ もう1点は人。表面上はそっけないのに、言葉を交わすようになった途端、ものすごく暖かいとはゼミ生全員が異口同音である。要するに波照間はまだ「観光地化」していないと見ることができそうである。「生成りのよさ」に感じ入った人たちが、さりげなく通ってくる。

やどかりのリピーターさん達は、ほとんど毎年オバアに会いに来る。観光の力の字も言わないまま帰ってゆく。このような人間関係は他で望むべくもないのか。時間と空間を超え、それでもキープしたい人間関係とは、どのように理解すればいいのだろうか。ホスピタリティという言葉から大きく逸脱するようでもある。

6. アンケートおよびフィールドワークから見てきたもの

1) 島間交通機関の現状

島民が波照間にかけているものとして最も多く挙げていたのは「交通」である。56%もの人々が

島間交通機関に不満を抱いている。また、観光客たちも波照間観光で不満だった点に36%の人が「船」を挙げている。交通機関は生活の要であり、より安価で早く、確実なものが求められているようである。しかし、現在島間交通として就航しているのは船のみである。1日5便、所要時間1時間の高速船。週5便、所要時間2時間の大型フェリー。前者の高速船は大人片道3090円、後者の大型フェリーは大人片道1540円である。高速船は波の影響を受けやすく、欠航が多い時には高速船は頼りにならず、大型フェリーが唯一の交通手段となる。また、高速船は大型フェリーよりも小さく波の影響をもろに受けるため、揺れも激しい。シートベルトをしなかったために起きてしまった船内での事故があって以来、船会社も警戒し、ほんの少しの波でも欠航の判断をするようになった。島民の中には、観光客が来なければ島民は慣れているので船も欠航しないのに……と不満を漏らす人もいる。それに比べて大型フェリーは揺れも少なく、高速船よりも広々とした作りになっているため、大変利用しやすい。

波照間空港からの小型飛行機の再開も囁かれてはいるが、果たして利用客はいるのか、過去何度も繰り返されてきた、利用者不足による運航中止を考えると、はなはだ心もとない。本土の各地をみても、1～2時間のところを航空移動する人は少ないことを考えると、航空便の必然性はそう高いようにも思える。

2) 島内での交通手段

島内での交通手段は、自転車・バイク・車のみとなっている。公共のバスなどは一切走っていない。小さな島とはいえ、観光客が徒歩で島内を散策するのは、気温が高く日差しも強い夏場は特におすすめできない。自転車の貸し出しを行なっている宿もあるが、自転車はきちんと整備されていない上に、貸し出し料金の設定もあいまいである。

車やバイクを貸し出しているところも数件あるが、車やバイクでニシ浜や最南端の碑を見て島内を1周するだけで帰ってしまうような人も少なくない。このような車やバイクの貸し出しが、日帰り客を増やしている原因とも考えられる。また、ゆったりとした島内には、子どもたちが自由気ままに遊びながら走り回っている。そのような島内で、都会のようなスピードで車やバイクを走らせる観光客にいらだちを覚える島民もいるようだ。郷に入っては郷に従う。ゆったりとした波照間の空気を乱さないような、観光のありかたを模索したい。

3) 観光客とゴミの問題

観光客の増加につれ、ゴミの投棄やマナーの悪さが目立つ。日帰りの観光客も多い波照間では、「観光客が島に残していくのはゴミだけだよ……」と不満をもらす島民の方々も見受けられた。

島民の方々が暮らしやすく美しい島を保つために、ゴミ問題は改善すべき点である。この問題は決して島民の方たちだけの問題ではない。今もなお、日本一きれいなビーチと称されるニシ浜も年々汚れていっているという。長年、住んでいる島民だからこそ気づく変化であり、そこを愛する観光客にとっても波照間のサンゴの海が汚れていくのは由々しき事態である。また、地球温暖



写真14 ニシ浜前に設置されている
災害時避難場所の看板

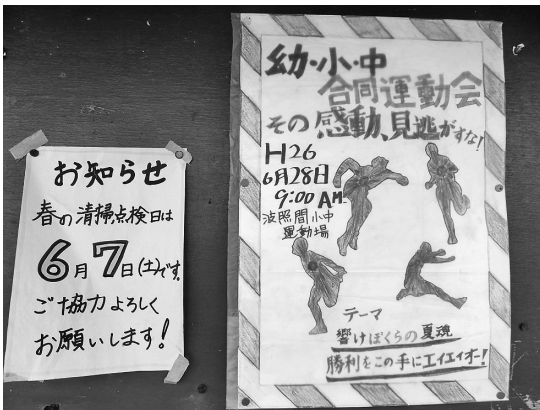


写真15 幼稚園・小中学校合同運動会のチラシ

化の進行や赤土の流出で美しい海が汚染され、魚介類がとれなくなってしまっているのも現状だ。それによって、昔は半農半漁だった波照間も現在では、漁業従事者はいなくなってしまった。

自然という波照間の宝を守っていくためにも、この問題の解決は急を要する。

4) 島民の観光に対する意識の差

私たちがフィールドワークをするなかで、観光業に携わっていない島民の人々たちの観光客に対する興味、関心が薄いように感じられた。しかし、観光客について尋ねたアンケート結果によると、問題点や不安要素も多い反面、観光客の増加によって経済効果が期待できると答えた島民の方が7割、また観光客との出会いに期待している島民の方が3割もいることが分かった。また、海外からの観光客を歓迎するかという問いに対しても、6割以上が歓迎する、もっと来てほしいと回答した。この結果から、島民の方々は観光客を歓迎していないのではないということが分かる。つまり、観光客と島民の方々が関わりをもつ場や、観光に対する政策などが不十分・不徹底のためにこのような意識の差が生じてしまうのだと考える。

島が観光客を受け入れる体制を今よりも強化することで、島の宿泊率増加にもつながる。表面上

は無愛想に見えてしまう島の人も、一度打ち解ければ気さくな人ばかりである。ただ、波照間にある自然に任せて観光を誘致するだけでなく、その内に秘めた人の温かさも観光客の人にもっと伝えていくことができたのなら、「最南端」というだけでは終わらない波照間になるに違いない。

5) 少子化と高齢化

波照間には高校がなく中学を卒業すると親元を離れ、本島にある高校へ通う子供たちが多い。また卒業すると、そのまま本土への進学や就職をしてしまうため、波照間にUターンする子供たちは多くない。今後島を担っていく若者が少なくなっているという状況は、各地にみられることで波照間も例外ではない。

島民たちの多くが子供たちの将来に対して、進学や本土で波照間とは違う体験をして欲しい、と考えていた。だが、そのあとに続く言葉は「しかし、いつかは波照間へUターンしてきて欲しい」という声。アンケート結果から見た波照間のQ11. 島民が求める波照間の将来像では、7%がUターンできる環境づくりと答えた。口頭質問によるコメントでも、子供たちに関する意見が多く寄せられている。

これらの対策として、島民たちの関わり合いの



写真16 合同運動会の練習中

場を増やし子供たちが帰ってきたいと思う活気ある島づくりや新たな取り組みによる雇用の拡大などが挙げられるのではないだろうか。

また、高齢化は日本全体の問題であるが、波照間のような離島にとってはさらに深刻である。現在、波照間では80代以上の一人暮らしが4割を超えており、今後さらに老年人口の孤独死が増加する恐れがある。上記で、述べたような子供たちへの対策は高齢者の孤独化を防ぐことにもつながり、若い者が高齢者を支えていけるような地域づくりに繋げていくことが出来るであろう。

6) 有効利用されていないハコモノ

波照間島内には、活用されていない建物などが多く見受けられる。例えば、農村集落センターは島の中心にあるが、ほとんど利用されていない。観光客に人気の星空観測タワーは、星空観測ツアーのみに利用されており、プラネタリウムがあることを知っている観光客は少ないであろう。また、島民の方が島外に出向く際や、観光客が波照間に訪れる際には必ず利用するであろう、ターミナルには島土産や、軽食なども販売提供されているが、観光客は帰るときにしか利用しないことがほとんどだ。どれもたてられてから20年以上が経過しており、このままではあまり使われないうまま、整備もされないままに、月日を重ねていくだけになってしまう。せっかく、立派な建物を建てたのであれば、有効利用しない手はないだろう。大きな建物であるからこそ、島民の方や観光客をも集まれるような場所づくりに活かせないものだろうか。

7) 竹富町・波照間島の滞在泊数

2013年の竹富町全域に対する、観光客入込総数は105万7000人だった。

竹富町観光課のデータを見ると、竹富町観光の平均が2.5泊である。そのうちの1.8泊は竹富町8島へのハブである石垣市内に泊ってしまう。竹

富町内に宿泊する人数はわずか0.7泊、73万9900人だけである。

つまりほとんどの竹富町への観光客は、石垣の宿泊をベースに、離島を日帰りでちょっとだけ見に行くというパターンである。それでも島には、10人のうち7人がどこかに1泊はする。この0.7泊を竹富、小浜、黒島、新城、鳩間、西表、波照間で取り合うとすれば、単純平均で1人1泊ずつ。これでは、波照間に限らず、離島の良さなどわかってもらいようがない。したがって波照間の観光を考えるとすれば、せめて2泊以上してもらう手だてを考える以外にない。観光客アンケートにもまた来る際に何泊したいか、という質問に対して約8割の人が2泊以上したいと答えている。島に来て自転車でも島を一巡り。あるいはニシ浜で半日過ごし、シャワーを浴びて石垣に帰る。それでおしまいというなら、少なくとも「観光による経済効果」などゼロである。ゴミとトイレの問題が残されるだけの始末だから、観光はお客様どころではなく「単なる厄介もの」に過ぎない。だからこそ、島民の方の多くが言っている波照間の魅力である「快適にのんびり過ごせる時間と空間」の提供は宿泊があるからこそではないだろうか。

8) 宿泊施設の質的不十分さ

波照間で特に感じたことは、宿泊施設の質的不十分さである。波照間にある民宿は現在16軒で223名収容となっているが、中には「ナニコレ珍百景」にまでわざわざ紹介されたという、途方もなくキレイではない民宿もある。シャワーに入った時、石鹸の置いてある箱に注意書きがあったので、読んでみたら「ネズミに注意」だった。都会から来た観光客の多くはシャワーを使ってネズミに齧られるのは困るのではないか。しかしここにも、「もう住み着いている」といった雰囲気のリピーター達がいる。これでいいと思っているリピーターはそれでいいが、新たな市場を獲得し

ようにするなら、宿泊施設の快適性をもう1段も2段も上げなくてはならない。宿泊客が求めるものに対し、あまりにミスマッチな宿泊施設の現状では、いいリピーターの確保が難しい。またインバウンドを考慮に入れる場合はなおさらである。「観光立町」という以上、なんらかのこうした支援策がないと、波照間などでは各民宿など、経営基盤が脆弱なだけに一步前に踏み出しにくいだろう。

9) 飾らない波照間

年間3万人もの人々を受け入れる波照間島は、良い意味でも悪い意味でも観光化されていない土地だといえる。きちんとした波照間の観光情報は少なく、観光客に向けた発行物もないに等しい。アクセス方法でさえ、きちんと明記されてはおらず、波照間島を訪れる人々は探り探り、最南端という場所を目指してやってくる。港に降り立ってみても、島内の地図など全くない。ただ、客を迎えにきた宿の人たちが佇んで待っているだけである。どこを見渡してもサトウキビ畑と青い空、そして白い道端に咲くハイビスカスが観光客を迎える。食事処を探してみようにも、地図はなくてまるで探検状態。運良く見つけられたとしても、今日は材料がなくなったからもう何もないよという始末。民宿やホテルも泊まりたければ泊まればいい。来るもの拒まず、去るもの追わずというスタンスの宿が多い。サービスの「サ」の字もないような、共同売店は集落の人々の生活がそのまま映し出されているようである。

ある人は、これを観光地なのに何もないじゃないかと不便に感じるかもしれない。だが、ここを訪れる多くの人々は、この観光化されていないのんびりとした波照間が好きだというだろう。そんな人々が民宿の常連となり、長年にわたり島を愛する観光客となっている。

10) 世界に発信すべき波照間

波照間は歴史でも見てきたように、台湾や中国など本土よりも海外との関わりが強い土地である。多くの悲惨な過去を抱えながらも、沖縄という土地は発展し、八重山諸島もまた発展を続けている。そんな中で、インバウンド市場も視野に入れていけないだろうか。島民の約6割もの方が外国からの観光客に来てほしいと考えている。日本国内だけでなく、このきれいなサンゴ礁を、沖縄特有のサトウキビ畑を、そして日本最南端という土地を世界にも発信していくべきである。外国人を受け入れるためには、まだまだハード面・ソフト面ともに問題はあるが、外国の人々にも波照間という土地を知ってもらうことは大変重要である。

7. 私たちからの提案

1) レンタサイクルの整備

小さな島とはいえ、島を歩いて一周するのは大変である。特に、真夏の波照間には容赦なく太陽の日差しが降り注ぐ。波照間の道は広く長く、起伏が激しいため徒歩でまわるのは少々困難だ。移動手段として、自転車が必要であると考え。車で移動するよりも自転車で島内を観光すれば、雄大なサトウキビ畑の風をさらに感じるができる。自転車でのおんぴりと島内を散策することで、たくさんのお会いや魅力も発見できるはずだ。かつ、観光客が置いていってしまうゴミや大気汚染などによる自然破壊に悩む波照間にとって、自転車での島内観光はエコにつながるであろう。

現在、波照間島ではいくつかの宿がレンタサイクルを実施しており、レンタサイクル自体実施していない宿も多くある。また、価格は宿が独自に設定したもので、時間や返却ルールなども統一されていない。台数も数に限りがあるため、気軽に利用することが難しい。

上記の分析で述べたように、観光客に望むことは何であるかという問いに対し、経済効果や出会いを望んでいる、という回答を得た。現在のレンタサイクル制度の改善により、島に一定の収入を得ることができ、観光客は島内をじっくりと観光することができる。また、バイクと自動車の貸出を辞めることで、事故防止や日帰り客の減少につながることを目標とする。

レンタサイクルにおいて、1台の自転車を1日中借りることができる一般的なレンタサイクルの制度を取り入れる。1日1台を一律300円で貸出しを行い、宿との連携をとり、宿泊者のみに貸し出しを行う。きちんと整備された自転車の貸し出しを徹底し貸出場所、返却場所はターミナルに限定しルールの浸透を図る。また、自転車のレンタル時に波照間島内のサイクルコースが提案されたパンフレットを配布する。これには、自転車利用者限定の食事処のクーポンを掲載。このマップにより、波照間島内の自転車観光は、さらに充実かつ有意義になるはずだ。【2）はてるマップ参照】

また、ターミナルにおいてのレンタサイクル貸出には、いくつか理由がある。まず、波照間島においてターミナルは立派な建物でありながら、ほとんど活用されていない。石垣島から波照間港に船が来航する際には、宿泊先の方々が送迎もかねて出迎えてくれ、すぐにその車に乗り込んでしま

うため、ターミナルを立ち寄ることはまずない。観光客の中には、波照間を去るときに初めてターミナルに立ち寄ったという人も少なくないであろう。

ターミナルにおいては、波照間の特産品である黒糖や泡波、波照間でしか手に入らない最南端の証などの記念品が販売されている。また、土産物屋の隣では沖縄そばなどの軽食も提供している。しかし、今は観光客がターミナルに立ち寄るのは島から帰るときのみ、島民たちのたまり場と化してしまっている。ターミナルをレンタサイクルの貸出場所として利用することにより、観光客がターミナルに立ち寄る理由ができる。そのため、ターミナル利用の経済的な活性化も望まれるとともに、ターミナルに集う島民たちとも関わりができるだろう。

2）はてるマップ

長時間の乗船で波照間に到着すると、あたりに何も無い静かな道路と平地が広がっている。海側に振り向くと「ようこそ波照間へ」という文字がペイントされているだけである。観光客の心をつかむには第一印象が肝心だ。そこで、ただの船着き場を「波照間に来た!」と感じる風景にしたい。

そこで、島の中心地にあった波照間唯一の島内地図の看板を、船着き場にも設置するのはどうだろうか。島内の看板は、水色の可愛いデザインですぐに目につく。到着して島の地形を把握できるので、すぐに行動しやすい。地形の把握は旅人には欠かせない。そして、てがるな島の地図が手元にあれば更に良いのではないだろうか。今回、私たちが特に苦労したのは飲食店の場所である。どこに飲食店があるのか、その飲食店の開店時間、定休日はいつなのか全く分からなかった。

私たちの提案する「はてるマップ」については以下の5点である。①1枚の紙での作成。表面には土地感を簡単に感じることができるよう全体



写真17 波照間島のマンホール



写真18 石敢當という魔除けの石が置かれている



写真20 石垣と緑に囲まれて、カフェを探し歩く



写真19 波照間の地図とともにシーサーがお出迎え

的な地図を掲載する。②裏面には時期のイベント情報や食堂や観光地などの詳細な情報を見やすいようにカラーで掲載する。③期間ごとに飲食店の割引クーポンや、1)にあったようにサイクリング制度を利用する観光客に向けて、サイクルコースなどを紹介したサイクルマップも地図に書き込む。④サイクリングコース内の休憩場所の掲載。島内に休憩場所は少なく、暑くても木の木陰にひっそりと座るぐらいしか休む方法はない。ならば、島の木を使ってベンチのようなものを作るのはどうだろうか。

このような看板や標識を港以外の島内さまざまな場所にも置き、観光客が迷わず島内を周れるようにする。このような提案は、初めて波照間を訪

れた人にとってとても親切な島という印象をもってもらうことができ、はじめに述べた船乗り場の壁のペイント「ようこそ波照間へ」がいっそう引き立つであろう。

3) 民泊制度の実施

波照間には高齢者の独り暮らしが多い。アンケートの結果に、「一人暮らしがさびしい」という回答をしている島民の方が多く見られた。普段、話し相手のいないおばあちゃんたちは、アンケート回収している我々を喜んで家に招いてくれた。そのような一人暮らしをしている島民の人たちによる、民泊制度を実施するのはどうだろうか。

現在、波照間では、民泊は行われていない。しかし、民泊を行うことで経済的効果、観光客との出会い、そして上記で述べた問題点の1つである観光客と島民の方の意識の差を埋めることができると考えた。民泊とは、一般的に言われるホームステイと同じイメージである。「島の暮らし、生活」を体験するための体験プログラムである。

まず、波照間を好きになってもらうには、そこでの忘れられない思い出が重要となる。忘れられない思い出とは、美しい自然の風景や人々との出会い、そして体験である。いい出会いがあればあるほど、その旅行の思い出が良いものになる。波照間に住んでいる人こそ、一番波照間の良さを知

っているプロである。しかし、その土地に長く住んでいれば、自分たちが住む景色は見慣れてしまう。そこで、民泊を通して、観光客と触れ合うことで島民の方自身も波照間の魅力を再確認することにもつながるのではないだろうか。もちろん観光客は、普段の生活からかけ離れた、何もない波照間での生活・食・人情・文化などに触れることにより新たな自分の居場所として思ってもらえるのではないだろうか。

民泊は、さまざまな日常の生活を、島の家族と共に体験することで島民の方と心からの深い交流となり、互いに絆が生まれるであろう。それによって、観光客にとって波照間が第2の故郷として認識されていくことも期待できる。また、逆に島の人も親戚が遊びに来たというような感覚で人と関わることができ、さまざまなコミュニティが形成されていくのだ。そしてさらに、これらの観光客は今後、リピーターとして地域をさらに元氣付けてくれる重要な役割となるに違いない。

しかし、高齢者の中には、「素泊まりだったら、民泊を行っても良い」という回答者もみられた。ご飯を作るということが負担となってしまうのであれば、宿泊者自身が食材を持ち寄り民泊のお母さんに教わりながら、ご飯を作るのはどうだろうか。これもある意味、新たな体験になりうる。あるいは、周辺の食堂や売店の売り上げ増加にも貢献できるのではないだろうか。

また民泊はプライバシーにかかわる問題もあり、行政が仲介するシステムを確立させる必要がある。波照間では、観光客の増加により宿泊先の予約競争が年々激化している。人気の宿はすぐに予約が埋まり、予約ができなかったからとやむを得ず日帰りする観光客も少なくはない。民泊における、課題や問題点は多いが、普及し、少しずつでも浸透させていくことが出来れば、日帰り観光客を減少させるとともに、1日でも多く波照間に宿泊をする観光客が増加していくのではないかと。さらに

波照間の新たな魅力として観光客を満足させることができると私たちは考えた。

4) 宿泊施設の基準設定

波照間の魅力の1つとして、島民の方の多くが「星」を挙げた。大半の観光客が、日帰りで帰ってしまう。夜空を見ないで帰ってしまう人を作らないように、最低でもまず1泊を確保させる必要がある。波照間にある民宿で「早割」のサービスを行い、星空観測ツアーの割引券を提供し、星空を存分に味わってもらおう。

そこで、アンケート結果から見た波照間の問題点、で述べたように、波照間の宿泊施設の質的不十分さは、宿泊日数の促進において大きな課題である。宿の質に関してある程度のボーダーラインを行政が設けるべきではないだろうか。宿の質というと、宿泊代・立地・施設の内装などのハード面。また、従業員や宿泊施設で提供されるサービスなどのソフト面などが挙げられるが、波照間はどちらも不十分である。

行政に宿泊増進を後押ししてもらうためにも、胸を張って宿だといえるレベルまで上げていくことが必要不可欠だ。

5) 修学旅行生の誘致

行政で修学旅行を請け負う、ということをして見たらどうだろうか。特に、普段都会で生活している子どもたちは、何もない場所と呼ばれる波照間で、のんびり自然を感じながらひと時を過ごすことにより、喧騒に満ちた都会を忘れることができる。

竹富島には多くの修学旅行生が訪れているにも拘わらず、波照間は修学旅行生を請けていない。例えば、民家に泊まり家主の仕事（農業、製造業、飲食業、観光業等）を数日間体験することによって、製造の過程を学ぶことができる。また、農家の方々も手伝ってもらうことにより、学生たちと

関わる機会もでき、作業も助かるのではないだろうか。子どもたちは大自然の中で、仕事を手伝い、島民の方々と交流を深めることによって、都会では味わえない貴重な体験ができるだろう。波照間ならではの体験をし、最南端の島を思いっきり観光する。農業体験だけではなく、島の人しか知らない穴場スポットやシュノーケリングも一生忘れない体験となるのではないだろうか。また、波照間は高齢者が多いことから、戦争の実体験を聞くことができる。波照間の歴史を現代の子供たちに話すという交流会を設けることで、子供たちの知らない戦争の学習にはこれほどふさわしい場もないであろう。忙しく引き回すのではない「SLOW な修学旅行」も沖縄の離島だからこそできるものではないだろうか。めったに行くことがない最南端の地に学生みんなで体験し、学び、自然を感じる。それこそが、社会を知る本物の修学旅行ではないかと考えた。

ここに訪れた学生は、それぞれに何かを感じ吸収した、波照間での修学旅行が、一生心に残るかけがえのない思い出と財産になるであろう。そして、大人になると学生時代の忘れられない記憶として、また波照間に行こう、そんなことを思うのではないか。学生時代にお世話になった人との出会いが再訪につながり、それがまた新しい人々を呼ぶ。そんなサイクルこそ今の波照間に必要なのではないか。

6) 農村集落センターの活用

波照間島内にある農村集落センターという、小さな体育館が島の中心にある。だが、農村センターは全く使われていない施設だ。アンケート結果に、観光客が来てよかったことに「交流ができる」という回答が多く見られる。これに対して私たちは、島民の方と観光客の交流をもっと深め、魅力的な島にするために農村センターと周りの広場を利用することを考えた。ここで、島で採れた



写真21 私たちが一晩泊まった農村集落センター

サトウキビやモチキビ、泡波などを販売するという交流の場を設けてみるのはどうだろうか。具体的には、①農作物の直売所、②農作物の加工品の販売、③観光客との交流場、④島民同士によるフリーマーケットの開催である。このような4つの役割をもつ建物にしてみたい。ここでは①農作物の直売所、②農作物の加工品の販売、③観光客との交流場に関して以下詳しく述べる。

① 農作物の直売所

上記の分析で、40～50代の3割が農業を職業としていた。波照間の名品といえば「サトウキビやモチキビ」だと答える島民の方も多いが、それらの農作物を生産者自ら観光客に向けて提供するのはどうだろうか。沖縄といえば、加工されていないサトウキビの甘い蜜を飲める、そう思っている観光客も少なくはないはずだ。だが、実際そのようなことを行なっているのは沖縄本島などの観光地にある限られたお土産屋さんぐらいだ。せっかく島の大半がサトウキビ畑なのに生のサトウキビを味わえないのはもったいない。生産者自ら販売することにより、サトウキビの成長過程を聞くこともでき、農業に興味をもつ観光客も増えるのではないだろうか。また農作物を使った郷土料理を教えるイベントも同時開催し、仕事を引退した65

歳以上の主婦たちが行うことによって、主婦のやる気も導く手助けにもなるだろう。さらに小学生の子供たちにそのような農業の製造過程、郷土料理を教えることで、島の伝統文化も教えることができる。

② 農作物の加工品の販売

農作物の直売所と同時開催してもらいたいのが、農作物の加工品の販売である。島にはサトウキビの加工所があり、島のいたるところで加工されたサトウキビが販売されている。だが、そのサトウキビは同じ島内でも価格設定がバラバラであり、1袋200円から300円になっている。価格設定を統一したサトウキビを販売するのはどうだろうか。もう1つの波照間の特産物であるモチキビもお餅に加工して販売するのはどうだろうか。私たちはアンケート回収の際、おばあちゃんからモチキビをもらったのだが加工の仕方がわからなかった。そのようなこともあるので、モチキビを使った加工品を販売するのはどうだろうか。波照間の主食は雑穀米であったが、健康志向の風潮がある今日では、雑穀米は観光客にとって興味の湧くものになるのではないだろうか。

③ 観光客との交流場

波照間の魅力の1つである「星」を観光客に味わってもらうために、野外で島民の人たちが料理や泡波を持ち込んで観光客とわいわい飲み会をして楽しんでもらうというものである。

違う場所で生活している人同士が互いに心を開き、互いに吸収していくことによって島民の方の統率がとれ、さらなる絆が生まれるのではないだろうか。波照間に訪れた観光客に関しては、せっかく時間もお金もかけて波照間という地に來たのだから、ぜひともここで最高の思い出を作ってもらいたい。「何もないところ」と言われるこの地で、形よりも心に残るものを得て帰って行ってほ

しい。そして観光客を迎える島民の方たちは、遠いところからたくさんの人達が來ることによって波照間以外の地を知ることができる。かけがえのない出会いを得ることができるだろう。波照間を観光したいと思ってここへ來た人たちに、島民の方が誇りをもって島のことを話すと今までより、一層活気の溢れる島になるのではないか。また、月間の「星空可視確率表」なども用意が必要だと思われる。

以上の提案によって、「農村集落センター」の存在が大きくなり島民の方々がここに愛着をもつことができ、また交流の場所が増える。観光客を迎え入れる気持ちも島の人に生まれるのだ。さらに人とのつながりを作ることによって一人暮らしのお年寄りの寂しさを防ぐことができる。この使われていない建物を島の活性化に少しでも役立てたい。

7) 星空観測ツアー制度の改善

4)で掲げた星空観測ツアーの提供を行うために、宿泊施設と観測タワーの連携でストレスのないツアーを提案する。波照間島の名物でもある、星。波照間島からみられる星の数は全国でも屈指の数である。日本で唯一南十字星がはっきり見ることのできるのも魅力の1つだろう。星空観測は波照間観光の中でも大変満足度が高く、上記の結果の中にも、波照間観光でよかったことは？という問いに対して「星」と答える観光客が多く見られた。私たちが民宿からのバスに乗りして、星空ツアーに参加した。繁忙期だったためか、バスは満員だった。観測所に到着すると、私たちを乗せたバスの他にも数台のバスが止まっていた。このツアーの参加費は一人500円。これには星空観測タワーの入館料も含まれているのかと思いきや、観測タワーに到着後また400円を払うことになった。この入館料の支払いにより、バスの全員が並ばなければならず、思いがけない大幅な時間の口



写真22 星空観測ツアーへ向かう満席の車内

スができてしまった。私たちが入るころには「もう始まるから急いでください」と言われる次第である。バス代+入館料込を最初の段階で請求することで、入館時の長蛇の列は解消される。また、星空観測タワーの入館料は個人大人：400円、団体大人：300円（10名以上、要予約）となっている。何度も手間をかけるのではなく、あらかじめバス料金と共に星空観測タワーの入館料を込みにした料金提示を心がければ、入館までの手続きがスムーズになり、満足度は最大のものにできるのではないだろうか。星空観測の解説はユーモアもあり大変面白いものであった。だが、人数が多く場所を移動できないので星空を見ることができないこともあった。今はバスに入るだけ詰めて、定員も設けずにどうにか成り立っているが、今後観光客数が増加していくうちに、人数が多いことでツアーの質が落ちていくことが懸念される。そのためにも星空観測ツアーの定員を定めるべきである。

この星空観測タワーにはカメラの貸し出しサービスがあった。しかし、そのことを事前に知る人は少ない。また、星空解説終了後にカメラで星の写真の写し方をレクチャーしてくれる。しかし、これは一眼レフのみ撮影可能なため、多くの人が写真を撮ることを諦めるしかない。そこで、ツアーに参加した人全員を対象として、星空と一緒に写真を撮れるというサービスを行うのはどうだろ



写真23 レクチャーを受けながら撮影した星空

うか。フィルム代や印刷代等込みで500円ほどにすることで、思い出の1つとして記念に残るものになるだろう。「はるばる波照間へ来たのに、星空を見ないで帰るのはもったいない！」という宣伝をすることにより、日帰り客減少にもつなげることで、また顧客満足度の向上につながるものと思われる。

8) フィルムコミッション

フィルムコミッションとは、映画やテレビドラマ、CMなどのロケーション撮影を誘致し、屋外撮影がスムーズに行われるように支援する非営利組織のことである。フィルムコミッションをうまく稼働させられれば、地域活性化、文化振興、観光復興につながっていくと考えられる。

ではどうやって宣伝していくのか。そこで私たちが考案するのは、インターネット上に波照間観光のホームページを立ち上げ、島の写真や映像を載せることにより、島の魅力を視覚的に伝えていく。時期ごとに違った波照間の景色を見せていくことでそれぞれの映画やテレビドラマ、CMなどの撮影最適季節に当てはめていくことができる。そのためには、まず波照間の魅力あるスポットなどを整理しておかなければならない。そのスポットがどこの管轄にあるか十分把握しておく。スポットの整理ができ次第、ロケ隊がきた時の宿泊場所、食事場所の確保など、よりよい整備が必要に

なる。観光業全体に新たに雇用も生まれる可能性がある。また、撮影の間その映像関係者以外にも、ファンなど多くの人が島に滞在することになり、経済的な面でもメリットがある。島全体が潤うことにより、島民の観光に対する意識が変わってくるのではないだろうか。

9) マイボトル持参制度の導入

八重山諸島の夏場はとにかく暑い。気温は東京とあまり変わらないが、最南端という土地柄、日差しがとにかく痛く、気温も高く感じられる。島には自動販売機が点在している。観光客や島民たちが1日に何度も自販機で飲み物を買っている場面を目にした。自動販売機はとても便利で飲み物がすぐ手に入る優れものではあるが、空のペットボトルというゴミが大量に出てしまう。輸送費により、物価は本島よりも高価であるが、水分補給は欠かせないため飲料水購入はやむを得ない。観光客は、高い飲料水を買いつけるのだ。そして、島に大量のゴミを残して、帰ってしまう。島民も、観光客が残していくゴミには頭を抱えている。上記の分析で、述べたように、観光客が増えて心配なことはなんですか、という問いに対して、約50%の島民が環境問題と回答した。その対策として、マイボトルを購入してもらう制度はどうだろうか。波照間オリジナルの飲料水の量り売りのシステムを導入し、マイボトルに入れる。もちろんペットボトルよりも安く飲料水を販売する。また、マイボトルは洗って繰り返し使えるため、ペットボトルゴミの減少に繋がる。まさに、一石二鳥だ。この活動が八重山諸島全体で行うことができれば、「八重山諸島の旅にはマイボトル」という特徴づけができる。また、マイボトルは本土でも利用可能だ。多くのコーヒーショップが、タンブラー持参によるドリンクの割引制度を実施している。

この小さな最南端の島では、そう大した時間をかけず定着させることができると考えた。さらに、

マイボトル持参制度を実施することで、エコな島として波照間にさらに注目を集めることができるのではないだろうか。

10) 「SLOW」な旅行の提案

波照間に複数泊してもらうには、波照間の真の良さははっきり理解する人たちが増えることであろう。半日で島一周を終え、石垣に帰って行く人々の大半は、「最南端の島に足跡は残した。何もなかった、おしまい」である。ここには顧客連鎖発生の余地がほとんどない。ツーリズムの基本は、常に顧客の満足度を高くすることである。当人たちは満足度がきわめて高くても、「次はどこ



写真24 波照間港に到着する安栄観光の高速船



写真25 ニシ浜の海ではスキューバダイビングをしている人の姿も見られる。むこうに見えるのが西表島

か他のところに行きたい」という欲求がある。当人がリピートしなくても「あそこはよかった、あなたも是非」という情報を発信することによって、次につながるだろう。夜空を見ないで帰の人をつくらないように、まずは1泊を確保させる手段を作る必要がある。そのために、高速船の欠航率の高さや週に5便しかない大型フェリーを逆手にとってみてはいかがだろうか。

「日本最南端の島、波照間島」というキャッチコピーに続けて、「日本最南端にそんな簡単に来られると思われちゃ、困る」とでもしておけば、逆に観光客の興味をそそることができるかもしれない。観光客のアンケートの中でも、「高速船の欠航が多くて困ったものの最南端の島にそんな簡単に来られたのでは面白くない」という意見も見受けられた。ならば、修学旅行生の誘致と同様に一般の観光客にもきわめて「SLOWな旅行」を提案してみてもはどうだろうか。

波照間までの交通機関は大型フェリーでゆったりと来てもらう。島に着いてからも、最低3泊は波照間に滞在し、シュノーケリングやダイビング、最南端の碑を見に行ったり、はたまた民宿でぼんやりする時間を設けたり。夜になれば、夜空を見上げながら泡波で晩酌。こんな企画は、定年後の夫婦やはたまた働き疲れた人にはもってこいの旅ではないだろうか。波照間なりの楽しみ方を民宿や民泊の人が提案していくことで、日帰り客の減少につなげることができる。

波照間の良さはたった1泊では伝わらない。急ぐ旅ならほかの土地に行け、とでもいうように少し強気な態度でいても、波照間の良さを分かってくれる人は確実にリピーターになってくれる。波照間の魅力、「海」と「星」を体験して帰ることがこの旅の第一条件となる。

その実現のためにも今後への投資では、小規模にせよ快適な宿泊施設が必要だ。とくに中高年を対象に考えると、「快適にのんびり過ごせる時間

と空間」の提供は不可欠とされるであろう。3)、4)参照。

11) 目的特化型の個人向け旅行企画 (SIT)

最低でも波照間2泊+西表3泊、といったような複数島宿泊を組み合わせたツアー企画を内容豊富に、年代や好み別に用意する。各島に1週間滞在したらどんな体験ができるか、長期滞在リピーターたちに、質的調査も必要である。3~7泊といった旅行企画を、なるべく多く用意する。個人旅行者に、選択肢を増やすのである。あえて「安・近・短」に挑戦しなくてはならない。とくにマスマーケット、メジャーな市場狙いを常とする大手旅行会社の企画担当者たちに、竹富町や八重山の商品造成を任せておいたのでは、現状から脱することは難しい。あくまで個人の、ゆっくりした旅行を志向する、目的特化型市場を想定したい。インターネットの効果的活用もそのカギとなる。全部のマーケットを狙う必要はない。星空(スターウォッチ)、カヌー、ダイビングやスノーケリング、自然体験、といったようなSIT(Special Interest Tour; 目的特化型旅行)に、マーケティングの焦点を定める。老若男女全部にまんべんなく、というメッセージの出し方は、結局誰に対しても何も言わない、というに等しい。なるべく的を絞ってタマを撃つ。知る人ぞ知る、でいいのである。日本の最南端に立ちたいだけ、という人もいいだろう。弾丸トラベラーに来るな、という必要もない。しかし、新たなマーケットを狙うのであれば、竹富町に複数泊、なんらかの明確な旅行目的を定め、アピールすることが重要であるだろう。

12) インバウンド市場

歴史的と文化的に見て、八重山地方は東南アジア、台湾方面への親和性が強い。中国や韓国には、これほど美しいサンゴ礁や海がない。石垣空港へ

の定期便までは時間がかかるかもしれないが、沖縄本島経由、あるいは石垣へのチャーター便の可能性がなくはない。沖縄本島の観光マーケティング活動と協働し、外国市場も視野に入れておくべきかと思われる。現在の波照間にはそれほど理想的なアコモデーションは用意されていない。しかし西表などには各種が揃っている。今後の世界遺産登録も視野に入れつつ、波照間の「日本最南端」も、常時発信しておくべきであろう。外国人に対しても、この地理特性は有効である。さらに言うなら、直接外国までアピールすると同時に、東京や大阪に在住する外国人数十万人が、まず手始めの市場として有望であるのではないか。

13) 市場開拓

Destination Marketing/Management Organization (DMO) という表現がある。これは特定地域を継続的に、市場に対して売り込むための組織をさす。観光協会や観光局といった、公的機関がその役割を本来は担わなくてはならない。しかし現状では、マーケティングをしっかり理解し、それを実行している観光協会はほとんどないに等しい。よって、①地域の魅力を洗い出して、きちんとした商品に仕立てる。②それを市場に流通させるべく、5W1H にもとづいてプランを立て、実行する。③販売促進策の計画と実行。④価格的な販売戦略を提案・実行する。これらをマーケティング・ミックスと呼ぶが、日本各地の観光協会、自治体の観光課のほとんどでは①と③に関し、ようやく断片的なそれが行われているに過ぎない。役所の中では比較的良く計画は立てられ、レポートもしっかりまとめられてはいるものの、そこまで終わり、というケースが多く見られる。いわばそのレポートが「担当者の存在証明」になる。具体的な結果につながらないのである。人事異動も多く、継続的な作業にならない。

こうした状況を打破するには、DMO を DMC



写真26 ニシ浜に向かう途中の喫茶の看板

(Destination Marketing/Management Company), つまり民間が担う方が手取り早い。商品化やセールス活動を民間化し、きちんとしたリターンをとりに行く。SNS を利用するマーケティングも、旅行会社に対する継続的かつ教育的な関係作りも、はっきりした使命に基づく DMC によるほうが、確実な結果を出すことができる。

14) パンフレット情報の出し方

現地で入手した、南山社発行の「やえやまなび」という無料情報誌がある。八重山諸島の観光ガイドマガジン、というサブタイトルがつけられている。A 4 判96ページという立派な体裁、オールカラーである。出版コストは、中に掲載されているショップなどからの広告収入かと思われる。全ページを100%として、各島のシェアをみてみた。共通の旅行情報が10ページ（約10%）。メインの石垣が58ページ（60%）。西表が16ページ（17%）。竹富・小浜各3ページ、波照間・黒島2ページ、鳩間・新城各1ページといったところで、残り6島合わせて12%である。広告費の比率がそうなっているから仕方がないとはいえるかもしれない。八重山と一口に言っても、これでは情報の出方が偏り過ぎである。竹富町の観光行政・観光立町関係者は、こうした情報発信のされ方にも注

意が必要だ。場合によっては「石垣」と「竹富」を、別建てにしてもらう必要があるかもしれない。パンフレットそのものを石垣から切り離してしまえば、こういったことはそれほど目立たない。広報・PR 戦略上、そういった点まで気を配る必要があるかもしれない。竹富町として「観光立町」をうたう以上、石垣におんぶに抱っこ、というポジショニングから抜ける必要があるのではないかと。

旅行会社としては営利企業だから、同じ1ページに対し、より多くリターンが取れる方を優先する。すると、これから新しく打って出ようとする国や地域のページはどうしても抑え込まれがちになる。竹富町としては同じ八重山ながら、この点を良く意識しつつ、宣伝広報戦略を練る必要も大切であろう。

15) 起業支援制度

中学を卒業後、波照間を担っていくはずの子どもたちはほとんどが進学のために島を出て行ってしまう。学業や仕事のために島を出ることは、島民たちも望んでいないもののいつかは戻ってきてほしいと半数以上の島民が願っている。しかし、現在の波照間の就職といえば、農業か製糖工場、または電気会社など多くの就職先があるとは言いがたい。そのためにも、新たな雇用を創造していくことが必要不可欠となる。島の将来のためにも、そして波照間が大好きな子どもたちのためにもUターンしやすい環境づくりは重要となってくる。

ならば、雇用も観光業で増やすことはできないだろうか。波照間島の課題となっている、宿の少なさや安定した食事処の少なさを埋めていくためにも、Uターンした島の子どもたちに起業を勧めたい。竹富町が観光立町として全面的なバックアップを行い、起業のサポートをする。そして、島を出た子どもたちに起業支援制度が確立したことを知らせるニュースなどを配信していく。このような活動のためにも、13)で述べた市場開拓が大

変重要となってくる。さらに、最も大切なことは、訪問者になるべく複数泊してもらうことである。これこそ、ツーリズムによる雇用創出の必要条件に他ならない。

また、波照間に住み続けている人が宿や食事処をやるのとは別のメリットが存在する。島を出て行った彼らは、都会の良さも厳しさも息苦しさも知って帰ってくる。そのような経験は、観光客として訪れてくる人々と同じような感覚で波照間を見直すことができるだろう。島の良さも不便なところも含めて、観光客にどのようなものを提供すればいいかが見えてくるに違いない。波照間にはまだまだ若い力が必要なのだ。



写真27 「あやふふあみ」でのタコライス



写真28 民家の前に置いてある、手作りのシーサー



写真29 ミーティングの様子

ら、波照間の特産品サトウキビは売れなくなってしまう。波照間はこれからどうなっていくのか。このような島民の方々の生の声が聞けることも、実際に行ったからこそのことである。懸念されることは多いが、波照間の魅力を尋ねるとやはり「海」が一番多かった。透き通るきれいな海は皆好きな場所である。しかし、何にもない島と答える島民の方も少なくない。ずっと波照間で生活していると、私たちのような観光客が求めるきれいな海も島民たちからみれば当たり前のことであって魅力とは感じないのかもしれない。

(2212-032 加瀬安菜)

8. フィールドワーク体験記

百間は一見にしかず

2日目の晩、私は体調を崩してしまった。39℃近くの高熱と腹痛に襲われ、夜中に診療所に行くほどになってしまったのだ。意識はぼんやりとしなくなり、診療所へは、やどかりに宿泊していた方が車で送迎してくれた。次の日も宿の方々に、面倒をみてもらい、大変お世話になった。やどかりのオバアは常に私たち学生のことを気かけ、私がようやく治ったときには「元気になってくれてありがとうね」と声をかけてくれた。他人をここまで心配し、面倒をみってくれる方達に出会ったのはこれが初めてだった。オバアは人と関わるのが好きで、民宿を1人で経営できているのも、ここに来るお客さんが皆良い人ばかりだからだと話す。常連のお客さんと会話するオバアの姿は本当に楽しそうであったし、皆オバアを慕っている。波照間に毎年1度は必ず来ると言う女性は、やどかり以外宿泊できないとさえ言っていた。島意識を強く感じた波照間だったが、実際に関わってみるときっとオバアのようにやさしい人たちのだろう。

島民の方々はこれからの波照間、そして日本の将来を心配していた。TPPが始まってしまった

暑すぎて温かすぎる沖縄

波照間初日。まずこの日は、全員で島の位置感覚を知るために歩いて島内を回った。ほんの10分程度歩くだけで汗が流れてくる。初めての活動は、様子を見て、アンケート用紙の配布を主にした。波照間の人はどんな人なのだろうと不安な気持ちを募らせながら、1軒目を訪ねた。そこは、男性の方1人のお宅だった。その方は、仕事であったにもかかわらず、その場で丁寧にアンケートを記入してくださり、少しほっとした。このまま、1軒2軒と訪ねたが、どのお宅も留守でない限り、快くアンケートを受け取ってくれた。また、一人暮らしをする、おばあちゃんが玄関口で、波照間の昔から今までに至るまで、どう変化してきたかというようなことを一生懸命聞かせてくれた。また、私の活動範囲にニシ浜海岸の方も入っていた。嬉しいことに、朝一のニシ浜海岸を眺めることができたのだ。小値賀の海もとても綺麗で感動したのを覚えているが、それ以上に素晴らしく、ブルーの濃さも場所によってくっきり違う。季節もちょうど梅雨明けで晴天の日であったために最高だった。しかし、2日目にして30度を越えてくると、自然と体力が奪われていくことに気付く。活動中には1日で500mlのペットボトルを3本は消費し

ていた。それくらい、水分を取らなければ、本当に倒れてしまうほどの暑さなのだ。

やどかりのオバアの優しさに私は助けられてばかりであった。やどかりの前を通過したときに、毎回「おかえり」と笑顔で迎えてくれる。そして、必ず冷たいさんぴん茶と黒糖でエネルギーをくれるのだ。

3日目から最終日にかけては、配布したアンケートの回収に回った。配布は予定通り、多くの枚数を配ることができたものの、いざ回収に行くと書いていないということが多々あった。そこで、日時と時間を設定させていただき、回収に回るという方法でもう一度やってみた。これは、やはり回収率をグンとあげることとなった。ここで、いかに効率の良い方法を見つけることが大切かを感じることができた。3日目の宿では、1人1人の自己紹介など、旅での出会いを大切にという気持ちも込めて、軽い交流会が開かれた。その場は、とても温かく和やかに進み、楽しい夕食となった。

4日目の夜は、夕食を全員で地元の居酒屋で済ませ、皆で500円の星空観測タワーのツアーに参加した。この日は、運よく新月であり、星が特に綺麗に見えるということであった。ガイドの方が、メジャーな星から初めて知る星までたくさんの星の解説をしてくれた。特に、天の川がとてくつきりと確認でき、私は感動した。まさにプラネタリウムに入っているような気分だ。また、一眼レフで星空をバックに全員で記念撮影もでき、とても夢のような時間だった。それから私たちのその日の宿、農村集落センターへ帰り、厳しい夜を迎えた。小さな体育館のステージに全員で雑魚寝状態。虫と共存して、風通りも悪く、気温も高く、なかなか眠れぬ夜。しかし、あらためて毎日自分がどんなに恵まれた幸せな環境で済むことができるかを感じることができた。

島の人々が私たちを支えてくれたから、このフィールドワークを最後まで終えることができたの

だと強く感じる。本当に感謝したい。

(2212-038 島田唯花)

前途多難、波照間ブルー

6月23日。いよいよ、出発の日を迎えた。波照間島までは、飛行機で石垣島まで行きそこからフェリーに乗り継ぐ予定だった。波照間行のフェリーの運航が未定という、不安を抱えながらも私たちは飛行機に乗り込んだ。ひとまず那覇に到着したとき、ムアツという気候の暑さに驚いた。フェリーは想像を超えるほど揺れ、何人か船酔いに苦しんでいた。私は少しずつ変わる海の青さに感動し、船の揺れはなんともないように感じられた。私は船酔い組を横目に、誰よりも元気に波照間島に到着した。那覇の暑さを超えるじりじりと突き刺さる日差しには驚いたが、絵具を溶かしたような青い海に真っ白な入道雲には興奮せざるを得なかった。午後から早速フィールドワークに取り掛かった。波照間島は島の中心に集落が集まっているため、アンケート配布に苦労はしなかった。しかし、暑さが私たちの体力を消耗させた。回収中に知るのだが、波照間には大きく分け5つの集落がある。名石部落を中心に、富嘉部落、南部落、北部落、前部落となる。これらの部落のなかで波照間島らしいフクギと石垣が残っているのは、前部落だそう。

また波照間に行きたいか。そう聞かれれば、今の私は即答することに躊躇すると思う。それはなぜなのだろうか。アクセスが悪いからか。活動が暑さでキツかったからか。宿が不満だったからだろうか。東京に帰ってきてからもずっとそれが引っかかっていた。波照間島には、星空観測タワー、日本最南端の碑などあるものの、波照間といえば！という建造物は特にない。しかし、それらには代えがたいほどの海、空、自然がある。あんなにも透き通った海は初めて見た。あんなに星がたくさんの空は初めて見た。先の見えないほど長

くまっすぐの道は初めてみた。波照間には、初めてたくさん詰まっていた。その度に、私は感動した。この島には、なにもないよと島民の方々は言う。しかし、それは決して悪いことではない。なにもないことが波照間の良さなのだ。島に流れる、ゆったりとした時間。常に表情を変える風景は誰もの心を癒す。

では、そこまで感動したというのになぜ私は答えに躊躇するのだろうか。それは、人との関わりに原因があるかも知れない。もちろん波照間でも多くの人にお世話になり、人の温かさに触れた。しかし、島全体に歓迎の雰囲気がないことが気になってしまうのだ。歓迎してよという気持ちではない。しかし、波照間には、こんなにも魅力がある島なのにもったいないと感じる。観光客同士の触れ合いは多く目についた。しかし、島民の方との関わりはやはり特定の観光業に従事する人々だけなのだ。(2212-043 高山クミ)

波照間体験記

今回のテーマは波照間観光の実態調査ということだった。温かい反応のお宅がほとんどだ。活動1日目は土地勘を掴むため、お宅に訪問し、アンケート用紙の配布から開始した。この日はじりじりと肌に染み込む紫外線、むわっとする空気に体力を奪われた。

2日目は体調を考え、長く昼休みをとった。その分、比較的涼しい朝8時から活動開始。私たちはこの日から、午前配布し午後回収するという方法でまわった。2日目にして気が付いたことは島民の方以外にも長く滞在している人がいるということだ。本来住んでいるところは他県にあるため、「島民ではないので、答える資格はない」という方もいらっしやった。しかし、3日目には波照間のプレハブで1カ月暮らしている埼玉出身の方にお会いする。島民ではない人が島で暮らすことは難しいという。私たちが何うと彼は丁寧

もさんびん茶とサータアンダギーで迎えてくれた。

午後は、息子と2人で暮らしているお父さんの自宅に伺った。訪問の約束をしていたために、午後の仕事はお休みして待っていてくれた。またもや、ゆっくりとお部屋に上がらせていただき、お話を伺う。奥さんは石垣に住んでいて、3人の娘さんも島外に住んでいるそう。お盆には毎年多くの親戚や娘たちが孫を連れて帰ってくる。1年を通してお盆は大きなイベントの1つなので、とても楽しみなのだと話してくれた。帰り際、友人や娘と孫たちと旅行に行った時のアルバムを見せていただいた。楽しそうに写真の説明をするお父さんは本当に家族が好きなのだろうと感じた。お別れを言う時、家の前で記念写真を一緒に撮ってくれた。屋根にいるシーサーも映っていて、とても良い写真だ。(2212-055 武田明莉)

10日間で変わったもの

波照間は、石垣のようにジメジメしておらずカラッとして、過ごしやすい湿度であった。だがやはり、太陽がジリジリしており体が痛かった。午後からフィールドワークが始まり、島民の方にアンケートをとった。わたしが行った地域は、高齢者が多く住んでおり波照間の歴史を多く聞くことができた。

2日目は朝からフィールドワークだったが、若い方々からも話を聞くことができた。島民の方の多くが言っていたのは、高速船の欠航率の高さであった。私たち旅行者も困っていたが、島民の方たちは買い物や大きい病院に行くときは高速船で石垣まで行くので欠航があると困ると言っていた。休憩時に白浜にみんなで寄ったが、海が透き通っていてとても綺麗だった。

3日目は午前中に高速船が出ると聞いたので、観光客にアンケートをとる。観光客のアンケートを見たが、波照間に来る観光客はリピーターが多いことを知った。私が見た中では30回以上という

人がおり、波照間が本当に好きなのだと感じた。また、島のどこが好きかという質問には、「なにもないところ」と答えている人が多く、波照間に臨むことは？に対しては「このままであって欲しい」と答えている人が多かった。このなにもない不便なところが波照間の魅力なのだろう。ターミナルでアンケートをとっている際に、ウミガメを見た。水族館などでは見たことがあるが、野生のウミガメを見ることは初めてで感動した。人が多くいる所なのに、ウミガメが来るとは。海がきれいだから確認することができたのだろう。午後の休憩時にまた白浜に寄ったが、2日目よりも海が澄んでいて綺麗だった。時間によって海の色が全く違った。再びフィールドワークを行なっている最中、沖縄の離島をすべて回ったと言う人に出会った。その人は沖縄の離島が好きで中でも波照間は1カ月離島の旅ができるなら、25泊は波照間だというくらい波照間が好きだと言っていた。その人も波照間の魅力は「何もないところ」と言っていたが何もないからこそ時間に縛られず、ゆっくりすることができるのだろう。わたしが回ったところは最南端の碑から近かったので、最南端の碑に寄ったがそこまでに行く道は一面サトウキビ畑で、まさに沖縄という風景だった。岩がゴツゴツしていて、整備されていない場所が多かったが、それも波照間の良さなのだろう。最南端の碑がある海は、白浜とは全然違い、最南端から見る景色は感動しかなかった。最終日の夜は、星空観測ツアーに参加した。本島では絶対見ることができない星が多く、さそり座をはっきり見ることもできた。この日は農村集落センターで寝たが、クーラーを効かせて寝ていることがどれだけ幸せかを実感した。この経験のおかげで、これからどこでも寝ることができそうだ。波照間から石垣に戻ったときに、石垣がどれだけ都会であるか身をもって感じた。(2212-056 神津和納)

10日間のおつきなわ

3年ゼミが始まり、フィールドワークについて話し合いをする機会が多くなった。皆それぞれが、調査をしたい島や町を調べ、プレゼンテーションを行った。その結果、「波照間島」に興味をもち、10日間のフィールドワーク実施を決めた。ただ、私達の想像を遥かに超えたものであった。その1つとして多くの課題図書である。波照間を調査するうえで、沖縄に関する歴史が重要になる。戦争に関してや波照間でのマラリアに関して、また米軍基地に関しての本などを10冊以上読んだ。またアンケートの作成や、飛行機の手配、宿泊場所の手配などを経て6月23日から10日間の波照間島フィールドワークを迎えることとなった。

朝8～11時、お昼休みと自由時間を取り16～18時という活動スケジュールで活動は行われた。最初は手探り状態であり件数を回ることができない。またアンケートの配布もできなかった。不安ではあったがペースをつかむと余裕もうまれ、配布や回収のペースも多くなった。小値賀の時とは違い、訪問しアンケートを配布して次の日に回収に行くという方法であったためか、配布したアンケートの8割以上は回収ができた。

しかし、予想をはるかに超えるような暑さであった。少し歩くだけでも無言で、ボーっとしてしまふ。現に熱中症になってしまったり、気分がすぐれなかった人もいた。最初にも述べたように「暑さ」が一番つらい。数カ月経過してもあの暑さは忘れられない。暑さを紛らわすために、トトロや森のくまさんなど小さい頃に歌った懐かしい曲を歌っていた。フィールドワークをする一方で、想像以上に波照間島内の観光もできた。綺麗なニシ浜にいたり、最南端の平和の碑にドライブを試みたり、また最終日の夜には星空観測ツアーに参加して、日本で一番星座が見られる場所で写真を撮ることができた。(2212-062 中村綾華)

力も尽き果てるま

波照間島に降り立ち、最初に目についたのは、コバルトブルーの透き通った海。小魚たちが群れで泳いでいるのも見てとれる。ああ、本当にあの「波照間島」に来たのだ。そう実感した。

島は歩けど歩けど、さとうきび畑。たまに白い砂の敷かれた道。時々、ヤギや牛に出会う。そして、自転車に乗った観光客をよく目にする。見渡す限り、高い建物はなく人工的な音も少ない。五感が自然のものを感じ取ろうと動き出す。東京で人工的な光ばかり見ていた目は緑や真つ青な海を見る。車の音ばかり拾っていた耳はさとうきびの葉のざわめきを聞く。鼻は海の塩の匂いや土の匂いを嗅ぎ、肌は日差しをひしひしとを感じる。そして、舌はさんぴん茶の美味しさを感じる。なんとも人間としての本来の姿に戻れる気がするのだ。

島の人々は波照間島特有の時間の中で、生活をしているように感じられた。やはりその土地にあったいわゆる「島時間」というものだ。朝早くに活動を始めて、お昼から16時ごろまでは最も暑い時間帯のため、家でお昼寝や休憩をしながら過ごす。夕涼みの時間になると、買い物や畑仕事などに戻っていく。そして、子供たちは元気に遊びだすのだ。実に理にかなった「島時間」だ。島のスーパーのような役割を果たす、共同売店がその島時間に忠実に営業していた。朝8時ごろに開店し12時まで営業。15時ごろ再開し、20時や21時ごろには店じまいをする。12時～15時までは、島民の方も出歩かないということなのだろう。最初の数日は、訳のわからない営業時間に戸惑った。なんでこの時間に開いてないのだろう、と。だが、1日も経てば瞬間に納得する。その暑さが堪え、自分たちの体力温存のため活動時間は限られた。必然的に共同売店にも暑さ真つ盛りの時間には、赴かなくなるのだ。

波照間島には船便もほとんどない、コンビニもない、大型施設もなければ、娯楽施設なんて1つ

もない。言ってしまうえば、便利なことなんて何一つない。バスもないので、島の最南端に行くには自転車やバイク・車で行くしかない。標識もごく少なく、「ニシ浜→」「集落→」という簡単なものがあるのみ。島で迷うことなんて、当たり前にある。そんな不便さが波照間には至るところに転がっているのだ。だが、それが観光地化されていない波照間島での強みともなりうる。

不便は時として、人との出会いを生み出す。道に迷えば、島民の方や同じ観光客の人に道を聞いてみる。ほんの小さな会話だが、そこからコミュニケーションが始まっていく。小さな島だからこそ、一度話したことがある人であれば、すぐまためぐり会えるのだ。また、民宿などでの出会いも大きな楽しみになりえる。沖縄の方言には「ゆんたく」という言葉がある。これは「おしゃべり」という意味だ。こじんまりした民宿には、どこにでも宿泊している人などが気軽に集って話すことのできる、「ゆんたくスペース」がある。そこで、宿の人と話したり、泊まっている人同士と一緒に食事をとったりするのだ。この時代、見ず知らずの人と話すことが憚られる時代。そんなときに、島という特殊な場所だと人は心を開きやすいのか。それとも、人との交流を楽しみに来ている人が多く集まる場所なのか。観光客の何人かは、波照間でよかったことは「出会い」があったことだという。民宿はその出会いの大きな役目を担っているのかもしれない。(2212-072 清水怜奈)

きれいで、穏やかで、温かい島

いよいよフィールドワークが始まり、私たちは気合を入れて各エリアに分かれて話し合いをした。私はターミナルで波照間から石垣に帰る観光客にアンケートをとる活動であった。しかしその日はフェリーが欠航しアンケート調査ができなくなった。急遽、他エリアの島民アンケートの調査に回り、活動を始めた。ここで生活している人たちは

どんな人たちで、私たちをどんな目で見るところか、どんな反応をするのだろうか、はじめ私は期待よりも不安のほうが大きかった。1件1件訪問していく途中に、地元の方たちとたくさんすれ違った。私たちが挨拶をすると笑顔で、少しきょとんとした顔で挨拶をしてくれた。なかには向こうから挨拶を交わしてくれる方もいて、とても温かい気分になった。私が想像していた以上に住民の方たちは友好的に接してくれて、これからの活動にも期待が高まった。そして私たちのエリアでは高齢者がとても多かった。自分の畑でゴーヤを採るおじいちゃん、畑を耕した後、飲み物を飲みながらお話している仲のいいご夫婦、孫をベビーカーに乗せお散歩しているおばあちゃん。いろいろな人がそこには生活していた。こんなんびりとした生活ができる場所はここ波照間でしかできないと強く感じた。生まれてからずっと波照間島に暮らしている人も自信をもってこう答えていた。やはりこの島は自然豊かで、雰囲気も穏やかな、とても魅力的な島だとあらためて感じた。これといって有名なものはないが、本土から離れたこの場所が、いつも自分たちが暮らしている町とは違い、まるで現実世界を忘れさせるようなのんびりとした町だからこそ、観光客も遠いこの波照間島に来ているのであろう。ここで生活している人たちはこの島が「何にもないけど大好き」と答える人がたくさんいた。その理由も今回実際に波照間島へきたからこそ分かったことである。

あるお宅を訪問したときに、30代のお母さんが、「子供にはたくましく育ててほしいから、大きくなるまではとりあえず波照間で生活することを選んだ」と笑顔で語った。その姿がとても印象的だった。たしかに波照間には元気な子供が多い。私たちが話しかける前に、子供たちのほうから話しかけてきた。暑い中、虫カゴを持って小さな自転車にまたがる、素直でかわいくて元気な子供たちは将来どこで何をしているのだろうか。もしこの

島を離れるのであったとしても、決して自分の生まれた地を忘れないでほしい、誇りをもって故郷を語ってほしい。私はここの島民でもなく、ただ1回訪れた観光客に過ぎない。しかしこの地の良さを知り、現地の子供たちには波照間島がどんなに素晴らしいところなのかを知ってほしいのである。大人になって別の場所で生活するとなったとしても、いつの日かまたこの波照間島に帰ってきてほしいと強く感じた。

(2212-088 佐々木かな)

超自然体験センター波照間

じつに小気味いいくらい、何もない島だった。サトウキビ畑がどこまでも広がっていて、透きとおった青い海が島をとり囲んでいる。ニシ浜のサンゴ礁は、世界でいちばん美しいですと、あるダイバーが教えてくれた。それから星空。ダイヤモンドをいっぱい細かく砕き、満天にばらまいたようなそれが、近くに遠くに、しんとした夜空に、永遠に、無数にある。もっと星座の勉強をしてくればよかった。夏なのに、背中に鳥肌が立つような気がした。この降るような満天の星空を身体全体で感じられる幸せこそ、何もない波照間ならではの「たからもの」であるに違いない。

ところが不思議なことに、この島には「星空観測センター」という大したハコモノができていたのだ。360度満天の星空が広がっているにもかかわらず。え、どうしてコンクリートの建物の中に入って星空観測？なぜ人工のプラネタリウム？冗談にしてはきつすぎる。余計なお世話を絵に描いたみたいではないか。

とはいっても、「ハコモノ行政の教育的サンプル」としてならここは秀逸だった。日本最南端の島における「無駄な公共工事」の見本。住民が「気がついたらできていた」という、行政による地域振興策の典型パターン。だれも見向きもしない、愚劣であり、突飛なデザインの代表例。おそ

らくこのテのコンクールでもあったらトップ当選間違いなしだろう。どこまでも続くサトウキビ畑の真ん中に、こんなものがぽつんと、どかんとある。夜たまにやってくる「星空観測ツアー」時の他は、一日中まったく人影がない。いったん建ててしまった以上、維持費などが自動的に発生するから、それを抑えるには無人のまま放り出しておくしかないのだ。

南十字星が見える島に、星空観測センターか……。わたしには民宿のオバアが、懐中電灯で星座を指し示してくれた。星空観測にこれ以上のテはない。

波照間は島全体が、朝日の、夕陽の、星空の、青いサンゴ礁の、入道雲の、超自然観測センターになっている。それを人々は全身で体感する。五感のすべてが研ぎ澄まされてくる。まさに究極のエコツーリズムがここにある。あくまでも無垢な海と空。ここに人工の観測センターは要らない。しかし再度いうなら、大学生の学びの対象として、これは実にすばらしい教材だった。ここから引き出されるテーマは、自然との共生、エコツーリズム、公共事業、地域振興、税金の使い道、無用の長物有効活用の方法、そのほか。

島の人々の意見には、波照間の自然を誇りとするものが圧倒的に多かった。ならばこんなモノは一刻も早く取り壊すべきである。プラネタリウムは、都会の学校にでも寄付してあげれば喜ばれるに違いない。自然を誇る島なら、これ以後こんなことを、絶対に許してはならない。Super Natural な波照間に、人工の手をこれ以上加えてはならない。

もし何十億かの予算があるとして、それを波照間にとって最善の方法で使えるとしたら、どんな使い方があるのだろう。という作文コンテストを全島民でやってみたらどうか。オバア達からいいアイデアが出るかもしれない。意外に中学生の中から、「これは！」という案が出されるかもしれ

ない。

(小林天心)

おわりに

10日間に及ぶフィールドワークは私たちにとって、暑さとの戦いだった。容赦なく降り注ぐ太陽。唯一の救いだったのは、私たちが滞在した期間は風がよく吹いたこと。これが数日遅ければ、ぴたりと風がやみ、サトウキビのざわめきも聴くことができなかったという。不幸中の幸いであろうか。

この暑さの中、フィールドワークは各戸を回らなければならない。普段東京にいて、こういった野外の気候に慣れない私たちは、フィールドワークの訪問軒数を稼ごうとするあまり、つい無理をしたようだ。どこまで自分たちの体調がここの気候についていけるか、体験的に判断がつかなかったのである。結果的に熱中症にかかる者が続出、「いつも誰かが寝ていた」という事態だった。お世話になった島の診療所の方々、ありがとうございました。

今回の反省点として上げられるのは、なんといっても下調べを怠ったことである。気温や降水量、船の欠航率や便数、インターネットや文献を漁れば、情報は山ほどでてくる。だが、私たちのフィールドワークにとって、もっとも大事だったことは、そのような数値ではない。船はどの程度揺れるのか、今の時期はどのような暑さなのか、など本当に行くことでしか知り得ない情報だった。帰ってきて感じたことは、フィールドワークの前に数人だけでも、関係者への挨拶も含め下調べのために、波照間島を一度訪れておくべきだったということだ。訪れてみなければ、その土地のことは分らない。下準備を怠ったことが今回の最大の反省点である。

ところで、竹富島の港のトイレにこんな貼り紙があった。「不便な島ですが、どうぞその不便を

楽しんでください」と。ああ、すごく良い考え方だなと感じた。都会のような便利さを求めるのではなく、訪れる観光客の価値観に合わせるのではなく、自分の島を知った上で観光客にも受け入れてもらおうという心が伝わってくる。一方、波照間島の港のトイレにある貼り紙には「みんなが使うトイレですので、汚さないできれいに使ってください」とのこと。なんとも、入った人が汚すと決めつけているような貼り紙。このような、ほんのささいな港のトイレという所にも、観光化されていない波照間が如実に現れているのかもしれない。竹富島や西表島が観光地として成功している最中、波照間島がここまで観光に無頓着なのはなんとも不思議である。

だが、そんな観光化されていない波照間だからこそ、体験できたことは数えきれない。水分をとってとって、汗として出ていってしまうような暑さ、はたまた星明かりを頼りに歩く帰り道、ナニコレ珍百景にも登場する宿にもめぐり会い、ゴキブリとともにゴザを敷いて眠る夜。予想通りにはいかない毎日に、私たちは飽きることがなかった。中でも、行きの高速船はあまりにも衝撃的なものだった。乗船してみると、座席にはシートベルトがついている。これをしないと、天井まで跳ね上がることがあり、骨折する客が出たりしたようである。まるでロデオだ。私たちも出だしはジェットコースターのような感じだったが、間もなく必死の表情に変わった。もちろん船員が配ってくれた緊急用ビニール袋に、顔を突っ込んだままの者が半数以上。波照間の港についた途端、岸壁の上にひっくり返ってノビた男女もいたほどだ。島民にすごい揺れだったと話をすると、あの3年に1度の揺れの船できたのか！それは大変だったね。と驚かれる始末である。やはり、実際に現地に行かないで、タイムテーブルを眺めているだけでは、こんなことまで分からない。

波照間島の活動はなんとも初めてのことだらけ



写真30 西表島カヌーツアーでの記念撮影

であった。だが、そんな不慣れな私たちを温かく迎えてくださった島民の方々がいたことに感謝をしたい。どのお宅に伺っても門前払いすることなく、よそ者の私たちを戸惑いながらも受け入れてくださった、その懐の深さは計り知れない。あんなに温かい人々が暮らす島ならば、私たちが目指す「SLOW な旅行」は波照間でこそ叶えられるに違いない。

最後に、たくさんの情報や資料をくださった竹富町の通事太一郎係長、沖縄の離島に関する行き届いた知識と、関係者の方々をご紹介いただいた株式会社カルティベイトの開梨香さん。そして農村センターを私たちに開放してくださった東迎一博公民館長。小中学生へのアンケートをお願いした比嘉達校長先生。みなさまのご協力抜きには、このプロジェクトは成立しませんでした。あらためて、アンケート調査にご協力くださった波照間の全島民、小中学生の皆さんにも、厚く御礼申し上げます。そして何から何まで、なかならず熱中症の学生たちに、心からのご配慮をたまわりましたオバア・「民宿やどかり」の崎山支那さま、本当にありがとうございました。

(レポート編集：清水怜奈)

参考文献

青山和夫ほか(2014)『マヤ・アンデス・琉球』朝日新聞

出版。

赤嶺守 (2004) 『琉球王国』 講談社選書メチエ。

安里進・土肥直美 (2013) 『沖縄人はどこから来たか』 ボーダー新書。

網野善彦ほか (1992) 『琉球弧の世界』 小学館。

網野善彦ほか (1993) 『黒潮のみち』 小学館。

網野善彦ほか (1992) 『海から見た日本文化』 小学館。

新崎盛暉ほか (2011) 『観光コースでない沖縄』 高文研。

池澤夏樹 (2012) 『カデナ』 新潮社。

石原昌家監修 (1990) 『もうひとつの沖縄戦』 ひるぎ社。

入嵩西正治 (1993) 『八重山糖業史』 石垣島製糖株式会社。

上里隆史 (2012) 『海の王国・琉球』 洋泉社。

上里隆史 (2014) 『琉日戦争一六〇九 島津氏の琉球侵攻』 中公新書。

梅林宏道 (2002) 『在日米軍』 岩波新書。

榎本渉 (2010) 『僧侶と海商たちの東シナ海』 講談社選書メチエ。

大江健三郎 (1970) 『沖縄ノート』 岩波新書。

大久保潤 (2009) 『幻想の島 沖縄』 日本経済新聞出版社。

大城立裕 (2010) 『琉球処分』 講談社文庫。

太田静男 (2013) 『夕風の島』 みすず書房。

太田昌秀 (2000) 『醜い日本人』 岩波現代文庫。

大山朝常 (1997) 『沖縄独立宣言 ヤマトは帰るべき「祖国」ではなかった』 現代書林。

沖縄県学生会 (1968) 『祖国なき沖縄』 日月社。

沖縄タイムス「甘味資源特別措置法」(昭和39年法律第41号)。

沖縄タイムス「砂糖の価格安定に関する法律」(昭和40年法律第109号)。

沖縄タイムス社編 (1970) 『鉄の暴風 沖縄戦記』 沖縄タイムス社。

奥野修治 (2007) 『ナツコ 沖縄密貿易の女王』 文藝春秋社。

小熊英二 (2003) 『〈日本人〉の境界』 新曜社。

鎌田慧 (2000) 『日本列島を往く(1) 国境の島々』 岩波現代新書。

鎌田慧 (2003) 『日本列島を往く(4) 孤島の挑戦』 岩波現代新書。

鎌田慧 (2010) 『沖縄 抵抗と希望の島』 七つ森書店。

神谷厚昭・山田真弓「波照間の地形と地質」(<http://www.museums.pref.okinawa.jp/museum/issue-report/image/hateruma/hateruma2.pdf>)。

慶世村恒任 (2008) 『宮古史伝』 富山房インターナショナル。

木崎甲子郎 (1985) 『琉球弧の地質誌』 沖縄タイムス社。

来間泰男 (1982) 『波照間島の農業とユイの意義』 沖縄国際大学南島文化研究所編『波照間島調査報告書』所収。

財団法人日本交通公社 (2008) 『八重山観光の動態及び波及効果等調査 報告書』。

佐藤優 (2014) 『沖縄評論』 光文社知恵の森文庫。

佐野真一 (2008) 『沖縄 誰にも書かれたくなかった戦後

史』 集英社インターナショナル。

司馬遼太郎 (2005) 『街道をゆく6 沖縄・先島への道』 朝日文庫。

下川裕治・仲村清司 (2011) 『新書 沖縄読本』 講談社現代新書。

ジョン・ダワー／ガバン・マコーマック (2014) 『転換期の日本へ』 NHK 出版新書。

ジョン・ミッチェル (2014) 『追跡・沖縄の枯葉剤』 高文研。

精糖工業会編・刊 (1997) 『砂糖統計年鑑』。

瀬長亀次郎 (2014) 『沖縄の心』 新日本出版社。

高良倉吉 (2012) 『琉球王国』 岩波新書。

竹富町 (2013) 『竹富町観光振興基本計画』。

竹富町観光協会・竹富町役場商工観光課 (2013) 『竹富町観光情報誌 ばいぬ島ストーリー』。

竹富町観光協会・じゃらん (2014) 『じゃらん 星降る島々八重山郡竹富町』。

竹富町商工観光課 (2014) 『竹富町の観光概要』。

竹富町役場 (2011) 『竹富町』。

竹中労 (1975) 『琉歌幻視行 島うたの世界』 田畑書店。

田村善次郎・宮本千晴監修 (2011) 『宮本常一と歩いた昭和の日本 No.1 奄美沖縄』 農文協。

都留重人 (1997) 『日米安保解消への道』 岩波新書。

農林水産省 (1999) 『新たな砂糖・甘味資源作物政策大綱』 プレスリリース版 法令全書より。

比嘉春潮ほか (1996) 『沖縄』 岩波新書。

平岡昭利 (2012) 『アホウドリと「帝国」日本の拡大』 明石書店。

開梨香 (2014) 『沖縄全県・教育の現状と基礎データ』 株式会社カルティベイト。

藤崎慎吾 (2005) 『ハイドゥナン』 早川書房。

藤島宇内 (1960) 『日本の民族運動』 弘文社。

古川博恭 (1981) 『九州・沖縄の地下水』 九州大学出版会。

外間守善 (2013) 『沖縄の歴史と文化』 中公新書。

前泊博盛 (2011) 『沖縄と米軍基地』 角川 ONE テーマ21 新書。

前泊博盛 (2013) 『日米地位協定入門』 創元社。

孫崎亨 (2012) 『戦後史の正体』 創元社。

松島泰勝 (2014) 『琉球独立論』 bajilico。

宮台真司・仲村清司 (2014) 『これが沖縄の生きる道』 亜紀書房。

ユージン・スレッジ (2007) 『ペリリュー・沖縄戦記』 講談社学術文庫。

柳田国男 (1956) 『海南小記』 角川文庫。

柳田国男 (2013) 『海上のみち』 角川ソフィア文庫。

山根嶽雄 (1963) 『甘蔗糖製造法』 光琳書院。

與那覇潤 (2009) 『翻訳の政治学 近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』 岩波書店。

「波照間－石垣航空路線の再開へ」平成25年10月02日付、『八重山毎日新聞』。